

何も絶え果て、裏悲しく涙もこぼるゝばかり沈み切つた心地になり、やがては又總身の血が湧返つて、胸頭へがし目がくらむのであつた。こんな切ない思ひをする位なら、何故自分から進んで司馬をも勵まし露子をも慰め、あんな大事を誓つたらうか。今更に手の中の玉を奪はれたやうに思ふなら、何故あの時それを露子の心に開定めたのであらうか。自分は何も彼も知らぬ振さへしてゐればよかつたのである。知らぬ振さへしてゐれば、事は自らにして扱つた筈である。今頃は勝利の盃に酔ふてゐた筈である、それなのに自分は何を好んでこんな我と苦悶の枷を着けたのであらう。母をも泣かせ自らも泣きたい思ひをするのであらう。縣は身を悶えて聲を揚げやうとした。

けれど、けれども、一度懲うと心を決しながら、自分は何うしても事故もなしにこれをもだすといふことは出来ぬ。露子として自分が此頃の思ひを聞知つたなら、如何に淺間しきものと思ふだらう。偏に兄と冊いて可愛く仕へる心根は、自分とて買つて遣らねばならぬ。酒匂の話にも自分を戀故には命の綱と頼んでゐることである。嘘ではあるまい、嘘でないことは毎度の音信でも分つてゐるのである。自分は百萬の人に非難はせらるゝとも、潔白なる露子の非難には逆も得堪へない。露子に幸あれと祈る自分の心に、悲しい思ひを

相思怨……男々しき決心

相思怨……男々しき決心

させることの何うして出来やうか。さうだ、自分は何時迄も迷つてゐる時ではない。露子を愛するなら何時迄も自分のことを考へてゐてはならぬ。折角の男々しき此決心を棄て、はならないのである。自分の爲すべき所は最初から決まつてゐる。今頃になつて氣迷ふ筈はないのだ。飽迄露子の幸福を圖らねばならぬ。司馬にも出来るだけの好意を表しなければならぬ。さうでなければ、自分は二人を欺いたものではないか。眞實のない男となるのではないか。酒匂に迄も再びあはす顔はないではないか。

さうだ、何時迄も迷想に耽つてゐる時ではない。ぐづくしてゐる時ではない。と縣は心中に叫んで覺えず卓を叩いたのである。そして稍落着いた心に、繰返して露子の司馬に宛てた手紙を讀んだ。縣は酒匂が何うして此手紙を手に入れたかに就ては、遂に少しの思ひを及ぼすことが出来なかつた。

手紙にはあの優しい露子かと疑はれる迄、大膽なことが書かれてある。露子は司馬を鎌倉から栗山へ引付けやうと企てゝゐる。縣は少からず驚いたが、見覚えのある露子の筆蹟は、これを打消すことが出来なかつた。併しこれ位のことには罪惡として數へることは出来ぬ。難を求むれば自分の返事を待たないで、二人が自由に交際をするといふのにあるけれども、

これは緩急に流れた自分にも責はあるのだ。露子ばかりを責むる譯には行かないのである。縣は兎や角の考へに耽つてゐる中に、又しても一種の物足らぬ、心淋しい氣にもなつたが、直に思返して立上つた。立上つた儘腕を組んで稍考へたが、獨り領いて、決意の色を見せた。

「全く酒匂が云ふ通りだ。此際一々母に圖つてゐたら、迎も容易に纏まるまい。さうだ、一先づ月岡家に申し出て、母の方のことは其後の始末にせう。二つを一度にしやうとすれば、採消される氣遣ひがあるのだ。月岡夫婦に承知が出来ないとはまさか云はれまい。何れにしても多少の感情を害するだらうが、それは他日になれば僕の眞意も分るだらうから、氣遣ふにも及ぶまい。さうだ、この足で早速にも月岡の家を訪ねることにせう。急いだ方が事後の爲に可いやうに思ふ。」

さう呟くと縣は手早く支度をして、母にも峰子にも断らず、忘れたか帽子も被らずに、ぶらりと家を出て、辻の車に飛乗つて曙町への途を急がした。

酒匂は露子と司馬が互ひの戀を楯に取つて、縣を強ひて思切らせるやうに努めたが、自分

相思怨……男々しき決心 一六

相思怨……思ひちがひ 一六

ては別に大いに期する所があるものやうであつた。何事を思つてゐるのであらう。けれども貧乏なる司馬に露子を養ふことの難しからうとは、其信する所であつた。露子を全く縣から引放すには骨が折れるが、それさへ甘く行けば司馬が露子の意を得ても、露子の父母が許しさうにないのも豫め期してゐるとは、幾度か自問自答した所である。所詮酒匂は露子を戀ふて、理を非に枉げても、それを遂げやうと考へてゐるのである。其爲にこれ迄獨りて悶えもし泣きもしたが、今はもう泣きもせぬ、悶えもせぬ。遣れる迄遣つて見やうと悪く度胸を据ゑてゐるのである。

酒匂は縣の家を辭して歸ると、荐りに縣の決心を氣にして、心配に堪へないものやうであつた。

思ひちがひ

十三の一

縣は露子の父を訪ねて、藪から棒に破約をして下さるやうにと、思切つて申入れた。父なる男爵の呆れやうといふものはなかつた。何が原因で思掛ないこんなこと言ひ出した

かど、一時は熱して其頬を染めてゐた縣の顔を、穴の明く程打見守つて、言葉も出なかつたのである。恐らく母と辭ひをして、激した結果ではあるまいか、或は快からぬことでも聞込んで、それで輕卒にこんな亂暴なこと云ひに來たのではなからうか。ついぞ露子を嫌つた素振だもしなかつた男が、突然も大突然、破約を申入れるといふのは、よも正氣の沙汰ではない。何とか此場を慰めて歸して、徐に縣の母とも相談をしたら、様子も分ることであらう。其中には氣も落着いて、當人の考へも元來の通りになるだらう。露子を上げやうといつたのも、迎へたいと望まれたも、これは決して世間並の結婚の意味ばかりではなかつた。縣の家門は自分が何處までも後見をして行く氣でなくてはならぬ。兩家の親密を増さん爲から云つても、是に越したとはないのである。當人同志も小さい時分から兄妹のやうにして、親じてゐたことだし、事情の上から云つてもこんな好都合はないのであるからと、數年前取決めて置いたもの、よしんば縣が露子を嫌つてゐたからとて、さう無難作に取毀たれる約束ではない。それも縣の母から申出された話なら考へても見ねばならぬが、何を云つてもまだ思案の纏まつてゐさうにもない、經驗にも乏しい若い者の口から云はれることであれば、何うしても正直に聽かれるものではない。

相思怨……思ひらがひ

相思怨……思ひらがひ

大分上氣せてもゐるやうだから、此處で理屈を云つて聽かしてもよくあるまいと高を括つて、注意してきいてはゐたが、可い加減にあしらつて、悠然と構へてゐた。で、餘り反對もせねば、固より賛成もしないのである。

露子の父は奇麗な髯を無意識に撈りながら、微笑を浮かべて、緩やかに、

「君の云ふ所は能く分つてゐるが、そこで一體この話の理由といふものは何ぢやな。只君の妻にしては露子に一生の不幸だの、好い男を世話するのといふだけでは、一向雲を掴むやうで、困り入るのぢやが。」と身を協側に凭せて親愛のあるやさしい言葉で云つた。

縣は稍血走つた眼を振仰ぎながら、肩を張つて膝を進め、

「併し夫婦といふのは愛情があつて、然る後初めて出来るものでせう。僕と露さんの間には遺憾にして、愛情の要素が缺けてゐます。ですから一緒になつてから、二人が何時までも苦むよりかも、今の中なら何うでもないことだから、二人で話合つて、さういふことにしたのです。僕にも露さんにも決して不都合の意志があつたとは御座いませんから、どうぞ御許可を願ひたいのですが。」と急込んだ口調である。

「難しい愛情とか夫婦とかの講義を聴くやうだが、それぢや何かね、夫婦になつても幸福な

生涯は送れない、それで二人で破約をするやう相談を決めたといふのなんだね。」

「さうです。露さんも大層それを喜んでをりましたよ。外のことには違ひますから、義理や何かばかりでやれるんぢやありませんもの。」

「それア分つてる。併し露が喜んだのは嘘ぢやらう。考へても分ることぢやが、彼女はそんな親の云ふことに反いて、破約を喜ぶといふやうな不都合な心がある筈はないのぢや。これア屹度何ぢやないかね、縣、君が厭になつたんで露を引合に出したのぢやないかい。いや、これは他人ではないからの話なんぢやから怒られては困るが、屹度さうだらう。はい、それだと露かどんなに可哀想か知れん。彼女は兄様々々つて、君のことが親より大切な位に思つてるのぢや。そこを何とかして買つてやるのも男子の意氣ぢやないか。不束な女を押着けるやうで可笑な話になるけれども、露の爲も思ひ、又他日は君の爲にも其方が可いだらうと思つての話ぢや。私の口からは可笑くもさこえるのだけれども……。」

「併し露さんに不利益になること、知れてゐながら、僕が、僕がどんなに何しても、それア露さんの幸福を祈るだけ忍びないのです。」と縣ははたと困つて胸が填るやうに覺えて、辛くも云抜けやうとした。

相思怨……思ひぢやない

「さういふことを云つてるぢやないか。大丈夫ぢや、君さへ我慢をして彼女でも妻にしてやらうといふ氣さへあつてくれれば、露はもう天にも昇る思ひがするぢやらうよ。はい、はい。」

「いや、鳥渡を待ちなすつて。そんな、そんな貴所ばかりも呑み込みになつても、事實はさうぢやありません。僕からして決して露さんを嫌ふといふのぢやありません。ありませんけれども……。」と縣は周章狼狽やつて、熱心に辯解し始めた。

「それぢや露さんがどんなにも困りなさるかも知れません。僕は露さんの自由の意志を束縛するとは忍びないので。それア既にこんな嚴とした約束迄も結ばれてあるのですから、僕が露さんの心を酌まないて、知らぬ顔をしてゐたら、露さんはあんな温良しい性質だから、胸には泣いてゐても、義理に迫つて縣の家の者ともおなりなさるてせうけれども、そんな思遣りのないこと迄して、永い間、兄妹も同様に出来た僕が、何うして露さんを苛めることが出来るてせうか。露さんが好まないと思つて、親の命令だからつて強ひるのは、僕はそれこそ本當に可哀想だと思ひますよ。強ひられる露さんの辛さも、又強ひたやうに思はれる僕だつて、どんなに苦しいか知れません。だから、僕は一生懸命に露さんの生涯の幸福の爲に、お願ひにまゐつたのですよ。決して他意ある譯ではありません。僕

相思怨……思ひぢやない

が露さんを厭ふなどは以ての外なんです。」

露子の父は聴いてゐる中に、何となく不安の念に驅られて、誠心を籠めて熱心に辯ずる縣の顔を、まじくと噴めてゐたが、色が動いた。

「ぢや、何かね。露から不承知を云ひ出したといふのかね。ありやうのことを隠さず云つてくれなくつては困る。そんなこと云ふ筈はないと思ふのだが……。露の考へが狂つて來たのなんだね。君、さうか。」と顔を突出して、男爵には意外も意外とて、驚愕も並大抵でなかつた。

縣は問詰められるやうに思つて、首を縮めた。流石に露子に意中の人があるとも云兼ねたのである。

「何ぞ露に不心得なことがあると君は認めただな。も少し委しいこと云つてくれなくては困る。隠すことはない、遠慮をせずに云つてくれなくては困るよ。縣、君それは何ういふ譯なんだね。」

「それには種々と事情もあることですが……。」と縣はまだ司馬のあるとを云ひ出し兼ねて控へた。

相思怨……思ひちがひ

相思怨……思ひちがひ

途端唐紙の蔭に聲がして、これも偷聞をして驚きに打たれたのであらう。少し熱した語氣の穩かならぬ顔をして、露子の母が入つて來た。

「ま、鳥渡其御事情とやら仰有るのは、お待ち下さいまし。」

縣は振返つて、やとばかり不意を喰らつて、二の句が繼げなかつた。僅かに取繕つて、

「小母様で御座いましたか。只今貴方へも彼方へ御相談にまゐらうと存じてゐた所でした。」と堅くなつてお辭儀をした。

「い、それにも及びませんですよ。」と何日にも似ず、いやに改まつて、

「貴所のお話は能く隣室で承はつてをりましたよ。ですが、まア、あんまり思掛のない……私は申上げるお言葉も御座いませぬ。」ともう臉をうるました。

「次郎さん、ですけれどもね、それぢやあんまり御親切が無過ぎるでは御座いませぬか。あの子に不心得などがあると思召すなら、さうと仰有つてさへ下されば、斯うして父や母もをりますから、決してその儘にさしては置きませぬ。お怨みを申すのぢや御座いませぬけれども、貴方があんな愚かな者でも、目を掛けてやらうと思召すなら、折角斯うしてお約束迄出來てをりますのに、何も貴方、一圖にさう仰有らなくつても、よろしいは御座いま

せんか。……い、え、私はまだ貴所のお話ばかりは、何うしましても露子にそんな親に反くやうなとあらうとは思ひません、思はれません。萬に足らぬのがあいやになつて、貴所から何をなさるのぢや御座いませんかと、私には思はれますわ。こんなことを申上げては、お怒んなさるか知れないけども、だつて貴所、一方は世間を知らぬ女子のことでは御座いませんか。よしんば心中には何と思つてゐても、貴所に向つてそんなこと、何うして申しませう、不道理では御座いませんか。それだと貴所は、本當にあんまりですわ。」

母は何處々々迄も露子に限つて、そんな親の定めた所夫に向つて、好き嫌ひを云ふやうな不躰なことがあらうとは思ひないので、縣の勝手にこさへた口實だらうと見て取つて、怒りが胸を衝くやうに思つたが、まさか口に任せても云はれないのである。それに何となく情無く思ふにつれて氣弱くもなつて、堪へやうとしても怨みがましく涙が先立つのであつた。

縣は呼吸もつまるやうに思つて、首僂垂れて聴いてゐたが露子の母のあんまりなどの怨言を耳にして、口惜しくも思つたのであらう。これを云ひ出す迄の胸の苦惱を察してもくれ

相思怨……思ひちがひ

なつて、切なくなつては、我知らず涙がはら／＼と落ちて來た。

「小母様、僕は何と申上げて可いか分りません。小母様のお心になれば、さう仰有るのは御無理も御座いませんけれども、僕だつて、好んでこんな苦しいこと申上げるのぢや御座いません。止むを得ない事情になりましたものですから……。」

「次郎さん、貴所は止むを得ない事情と仰有るのですね。一體其事情とは何で御座います。それアあいやになれば、何れ其處には種々の御事情があんなさるに相違は御座いませんでせうともね。貴所の御事情ならば、私共で何うとも致し様は御座いませんから、露子にも話し遊ばさなくつても、それア決してもう私共からの御無理は申しません。申しませうよ。」と母は涙の目に屹と縣を見て……

「只今のお話によれば、何うやら露子にも迷惑にならうとの心遣ひですが、ね次郎さん、貴所に御事情があんなさるのですと、露子のとよりかも、御自身の御迷惑がどんなだか、それをお考へ遊ばすのが御大切なので御座いませうよ。他家の娘などは何うても宜敷いては御座いませんか。……ね、他家の娘がどんな可愛想な目に逢ひましても、そんなことは何うても宜敷いぢや御座いませんか。貴所も随分なこと仰有いますねえ。」と怒りが昂じ詰

相思怨……思ひちがひ

めて、あの愛情深い口から、身を刺すやうな皮肉を云ふのである。

「そ、そんな、小母様、そんな卑劣なこと、僕は少しも思つてはをりません。僕の事情と申しますには、決して僕一個の身勝手を申しているのぢや御座いません。僕は露さんが厭になつてこんなことが云へるなら、どんなに幸福か知れませんけれども。も少し深く事情をおさぐり下されば、事實が分りになりますてせうに……。」と縣は語呂が亂れた。

「では何ですね、貴所が露子に對して、御不平があんなさるといふのでは御座いませんですね。」

「仰有る迄もないぢやありませんか。てすけども……。」と云はうとするのを制して、

「鳥渡も待ちなすつて。では何ですか、貴所の阿母様がお氣に召さないとても仰有ですか。」

「い、え、母はそんなこととこぢや御座いません。一も二も露さんでなければ……。」

「それぢや、露子の方からさへ不賛成を申しませねば、貴所がさう仰有るには當たらなひては御座いませんか。可笑いでは御座いませんかね。」

「それが、小母様、さうは行かないんです。」と縣は苦しうに云つて、汗を拭いた。

「い、え、貴所や阿母様に御不足があんなさらないとすれば、外に故障の出やうは御座い

相思怨……思ひぢがひ

相思怨……思ひぢがひ

ません。露子に不賛成を申すやうな筈は御座いませんよ。假令あつた所で、女子のことは御座いませんか。女の子が何を申すことが出来ませうか。親の吩咐に反いて、我儘な振舞をすることが出来ませうのですか。世間ではどんなところが流行りますか知りませんが、月岡の家には決してそんな勝手がましいことは許しません。萬一露子の口から、貴所に左様なこと申したのでは御座いませぬね。ね、御座いませぬね。」

縣は又しも苦しみ出した。斯程迄に露子を信じてゐられるのに、何と説明することが出来やうかと、俯向いて黙つて考へ始めたのである。

縣が返事をしないのを見て、露子の母は稍安堵の思ひをすると共に、少しは怒りも解けて、「又そんなことのあらう筈は御座いませぬ。それならば、貴所の御事情と仰有るのは、何で御座います。」と穩かに訊ね出した。

「小母様、僕の口からは何事も申し悪いのです。申し上げる氣で參つたのですけれども、何か申されませぬ。委しいことは母にも申さぬこととすし、小母様もどんなに驚愕なさるか知れまいと思つて、僕は何うしても口に云へませぬ。夜にも又伺ひませうから、どうか落着いて考へ置きを願ひます。決して僕は無責任なこと申すのではありませんか

ら、その心算になさつて下さい。」と縣は進退谷まつて、術ない思ひを僅かに述べたのであるが、何か町噂に袂帛に包んだもの取出して前に置き、

「一應これを御覧になつて下されば、大體の消息はお分りになる筈です。僕は何處迄も露さんと同情します。妻としてよりは、これからも今迄通妹として親しくしますから、何うかさう思召して下さるやうにお願ひします。露さんもどんなにかそれをお喜びなさるてせう。」

縣は云ひ畢ると咽んで少時顔を上げ得なかつたが、挨拶もそこくにして、心得兼ねて居る露子の父母を残して、力抜がしたやうに立退いた。

露子の父母は顔見合したが、父は慌て引止めるやうに背後から聲をかけた。

「縣、君少し待つてくれんければアならん。まだ用がある。用が残つてゐるぢやないか。」けれども縣は振向きもせず、強ひて月岡家を辭したのである。

十三の二

縣が見よとて置去にした袂帛の中を調めると、中には一封の手紙が入れてあつた。疑はし

相思怨……思ひぢがひ

さに急いで開封すると、香ばしき墨の薫に、ゆたかなる筆の運びは、紛ふ方もなき露子の手蹟である。

相思怨……思ひぢがひ

露子の父母は驚きと怖れの思ひに驅られて、引張合ひながら額を突合はして眼を動かしたが、母は到頭讀み畢ることが出来なくて、血が冷え心が寒くなるやうに覺えて、果ては腹立たしげに、手に持つた手紙を投出して仕舞つたのである。

「何うしてアこんなことが……何うしてこんな大膽なことをする氣になつたので御座いませうねえ。本當なら次郎さんがお怒りなのも無理はない。家族一同の者に迄、こんな恥を搔かすやうなことを何故してくれたのでせう。何日の間にこんな氣にはなつたので御座いませうねえ。」と母は胸を抑へて、つく／＼と面目なげに云つたのであるが、露子に限つて、斯る不心得があらうとは、今が今迄こればかりも思つて居なかつたので、縣に向つて一圖に立腹して云つたことが、過ぎたと知つて、此上もない濟まないことに考へられて、居堪まらない氣がすると共に、悲しき口惜しさが胸を衝いて、もうほろ／＼と涙を流した。「こんなことせよとて、貴所、葉山に遣つて置いたのでは御座りませんですのに、まさかまさか間違つたこと考へませうとは思ひませんばかしに、あゝやつて氣儘にさして置いたら

病氣も全快せう、精々丈夫にして置かねば、後てふらくしてゐるやうでは、それも困りものだからつて、それを氣遣つたばかりに氣長く保養もさしてあつたのでは御座いませつか。それなのに何といふ情ない氣になつてくれたでせう。何といふさもしい見下げ果てた心になつたでせう。次郎さんにも阿母様にも、何う申譯か出来ませうか。貴所、私はこんな口惜しいことは御座いませんよ。」と顛へる手に再び投出した手紙を取上げて、霞む眼を睜つて意味を辿つたのである。父も思案に晦れて、唯一言の言葉も出ないのである。

「こんなことがあらうと知つたら、この九月の時に獨りて残して歸るのぢや御座いませんかつたんですに。司馬といふ人も深切な方と思つてゐましたのに、何といふ人て御座いませうね。次郎さんとはち友達と云ふ間なのに、こんな道ならぬ考へを露子にさして、平氣でゐられるといふことがありますものか。又こんな人の親に迷惑をかけて、濟むと思ふのでせうか。道ならぬことの遂げられると思つてせうか。人の子を傷物にして喜んでゐるといふ法がどうしてあるものでせう。」

「全く思掛けなかつた。司馬といふのは何かの、この春の男かの。して見れば縣が如那云ふのも道理ぢや。いや、これは俺等の監督が足らなかつた爲かも知れん。困つたことになつ

相思怨……思ひぢがひ

た。」と父は力無く云つて俯向いたが、氣遣はしさが深く其額面に刻まれて、人知れず溜息をするのであつた。

相思怨……思ひぢがひ

「斯うなりますれば、露子ばかりが悪いとはなりません。母の私に氣が附かないでゐましたのが、重々悪かつたので御座いますよ。本當にもう次郎さんや阿母様に、こんな不面目に存じますことは御座いません。何として又と顔が合はされませうか。」と口惜さうに齒齧をして、顔も上げ得ないで鼻を擧げた。

當惑し切つた父も眼を連陸さながら、猶叱るやうに云ふのである。

「泣いても仕様はない。泣いたばかりでは仕様のなりことではないか。露を此儘にして置く譯には、世間に對しても濟まんことぢや。」

「はい。それはもう此儘にして置かうとは、私も思ひは致しません。兎に角に葉山東京とかけ隔つてゐては、處分を致しますすにも手の着けやうが御座いませんですから。……本當にまア飛んだこととしてくれましたねえ。」と思ひに沈んだが、やがて、

「ですが愚痴を申してゐるまでも、何うなることでも御座いません。私はこれから葉山にまゐりまして、驅されるものならば一應何とでも致しまして、連歸ることに致しませう。

兎も角今暫らく、母にも預けなすつて下さいまし。」

母は今日の中にも葉山に向ふ考へらしく、日が暮れかゝつてゐるのも知らず顔に、あたふた立上つた。父は思案顔の押黙つてゐたが、努めて心を定めたらしく、

「待て、連れて歸つては、却つて處置をすることが出来なからう。私にも決心がある。斯うなつては今更悔いても仕方はない。家に入れては恥の上の恥だと思ふ。縣ばかりに不面目ぢやない、世間に對して不面目の限りぢやないか。この手紙が事實なら、連れて來た所て始末の仕様がないのぢや。結句家には入れない方が可いのぢや。いや斷じて家に入れたはならん。」

「えハッ、それでは如何なさいます。捨て、お仕舞ひなさるのですか。貴所御勘當なさるお心で御座いますか。」と母は呆れて、足溜もなくよろ／＼として、倒れるやうに其處に坐つた。

父は急はしく瞬いて云ひ進んだ。

「私にも大事な子供ぢやから、決して可哀想に思はんといふことはないが、此儘に家に連れて歸るやうのことがあつては、私の身として縣の母に對して濟まないことぢや。縣の父に

相思怨……思ひぢがひ

相思怨……思ひぢがひ

は生前誓つたこともある。それは奥も好く知つてゐる筈ぢやらう。私は娘を許嫁れやうと其時から約束をしたのぢやないが、兎も角縣の遺族は何處迄も私が引受けて世話をせうといふ誓ひを立てた。今度の事は縣の母からの話で、私も、傍、雙方の都合ぢやと思つて取決めた次第ぢやから、さう無難作に破約をするといふ譯には行かん。併し此方にそんな都合があつて見れば、固より此方から無理にもと云はれる義理ではない。かと云つても又全然引下るといふことも出来ん。裁判は斯うなれば縣の方でして貰ふのぢや、縣の母に頼むのぢや。何れにしても一通りの教育もある露に、汚らはしいことがあつて、それを見許して連れ歸るといふことはある筈でない。月岡の門を潜らしてはならん。私からは、未だ知られん様子ぢやから、縣の母に知らして處置を願ふつもりぢや。」

昔氣質の義理の堅い露子の父は、偏に濟まぬことをしたと、それが氣になつて堪まらないので、露子を可哀想なとは親の情として思はぬこともなかつたが、今はそれだけに決心も堅いのであつた。母は口惜がりながらも、流石にそれ迄に露子を思切能く處置しやうとは思ひ得なかつた。

て、涙を押拭ひながら、

「此手紙が本當のこととて御座いますれば、それはもう何う御處置を遊ばしても、異存を申すやうのことは致しませんが、未だ逢つて見ません中は、どんな鹽梅なこととて御座いますか、かいくれ分りませんのですから、どうぞそれ迄の所を私にも預け遊ばして下さいまし。此手紙には日附も何も御座いませんから、夏頃に司馬といふ人も鎌倉へ行つてのやうに聞きましたから、ひよつとしますれば一時の迷ひで、こんな氣になつたのかも知れませんが……私に逢つて委しい事情も聞かれました上になさつて下さいませれば、露子が爲にも幸福なので御座いますから。私は此手紙だからと申しましたが、誰か眞似たものではあるまいかとも思はないことはありません。いえ、家におて何う考へて見ましても。露子にこんなことがあらうとは思へないんで御座いますよ。」と母は露子の手と鑑識はしてゐたが、一時を繕ふ爲に故意と疑問の中に葬らうと努めた。

父も強ひてとは云ひたくない。
「逢つて事情が知りたいなら、私も無理には引止めん。又さうするのが或は順序かも知れん。」と自ら理由を附したが、さも意氣の衰へたやうに、ぐつたりと肩を落して嘆息した。
「ぢやがの、それが幸ひと間違ひであつてくれれば結構だが、若しさうでなかつた時分には、

相思怨……思ひぢがひ
三〇三

何も容赦は入らんから、私の心持を云つて、再び家には入れることはならんと云ひ渡すやうになさい。私は何だか何うも危ない氣がしてならん、間違つてゐてくれれば可いが……。」
母は涙含んだ眼に、嬉しさうな笑まひを見せて悲嘆を隠しながら、
「不幸福にそんなことで、も御座いましたら、屹度私から意見も加へませうし、云つて聞かして不面目のこのないやうに致します。いえ、私だけの考へでは、もう此手紙が間違ひのやう存ぜられるので御座いますよ。」と慰めるやうに云つた。

「どうぞ、さうあつて欲しいものだが……。併し何れにしても縣の母迄は知らして置かねばなるまい。縣から云はしては却て不味いことにもなるといふものだ。この方は私が引受けて程能く話して置くことにませう。」と父も心には事勿れと祈りつゝ、母の葉山行に溢々ながら賛成した。

もう肌寒き秋の末つたの日は、何處からとなく暮れ初めて、仄暗い室の中に、二人の溜息が微かに聞かれたのみで、寂悶として天地は静まり返つてゐる。
母は今宵一夜を明かし兼ねて、そこへに出立の用意をした。露子の近状はどうであらう！

相思怨……思ひぢがひ
三〇四

夕暮の客

十四

酒匂は一旦自分の下宿へ歸つては見たが、縣が自分の話を何と聞いたであらうか、露子の手紙を何と思つて讀んだのであらうか。あんな果斷に富んだ縣が何となく優柔不斷に流れて、自分の前で決心し兼ねたのは、或は露子に未練氣を生じたのではあるまいか、さう思へば氣の所爲か情氣返つてゐたやうにもある。と机の前に胡座を掻いた儘、首を傾げ、目を睨り、獨語を云ひなどして、氣遣はしげに時を費したのである。果ては家に落着き兼ねて、ぶらりと當途もなしに散歩にと出た。

酒匂の考へては、兎も角理に絡んで縣を思切らせるやうにせねばならぬ、夫さへ計畫通に行けば、司馬と露子の間を裂くことはお茶の子である、司馬の老父母の貧に瀕したのを使ふもよし、露子の父母に不同意を唱へしむるも亦差支はないのである。此方は自分自身の手には行はれ兼ねるかも知らぬが、縣を遣つてもやれぬことはない。併し計畫にはばかり富んでも手前が抄取らなくては何うもならぬ。差當つての用務は今も云つた縣の決心だ、

相思怨……夕暮の客

三六

縣の胸を固めさせることである。さうだ、自分は未だ目前の大事を成遂げないのである。酒匂はさう思到ると一刻も安んじてゐることが出来ないのである。

相思怨……夕暮の客

三六

ふツと立停まると、酒匂は何時か縣の家の前迄遣つて来てをつた。自づと足が此方へ向いたものと見える。酒匂は同じ日の左程時間も経たないのに、重ねて訪問するといふのも妙でないかと考へて、其儘引返さうとしたのであるが、様子を訊かないで歸るのも残り惜しいやうに思はれて、體裁を悪がつてゐる時ではないと、遂に無遠慮に玄關先に突立つた。

例の如く峰子が飛んで出て、編物を袂にねぢ込みながら取次いだ。縣が留守と聞いて、はてなと酒匂は小首を曲げて當惑したが、それとなく峰子に訊ねても様子は分るだらうと思ひ着いたので、暫く待つて居やうと押上つたのである。書齋に通される、茶が運ばれる。差當り峰子が主人役をして、二人が座を構へた。話が進む。

「兄様は此頃から元氣がないやうぢや御座いませんか。餘り勉強しては不可いつて、貴嬢から忠告してやつて下さいな。」と酒匂はなれ／＼しく語つた。

峰子は可愛い眼を熱心に振り向いて、

「全くなの、全然病氣上旬のやうなのよ。それ程勉強してのやうでもないんだけど、折

々ね、溜息をして、何か考へ事をしてゐらつしやることが多いわ。何うかしたのでせうか。」
とらう云はれて見れば、近頃の兄の様子が只事ならぬので、

「何か心中に屈託なことがあるのかも知れませんがねえ。昨日なんかね、一日閉ぢ籠つて
青い顔をしてゐらしたの。」

「それア不可ん。どんなに心配なことがあつても、快活にしてゐれば、自然と心配もなくな
る筈なんだから、峰子さん、是非共貴嬢から忠告をしておんなさいな。僕もさう云つて
遣りますから。」

「私が云つても駄目よ。だつて私のいふことなど、それア肯入て下すつた例がないんですも
の、酒匂さんは友達同志だから、貴郎なら可いと思ひますわ。」

「僕がですか……。それア僕からも云ひますけれども、兄妹だから貴嬢の言葉が能く耳に入
りますよ。友人と云つても他人ですもの。」と酒匂は笑ひながら云つた。峰子はかぶりを振
つて、

「いゝえ、兄妹だから猶不可いんですよ。友達同志ならどんなことでも云へますけれど、兄
妹となるとさうは行かないものですよ。私は露子さんに手紙を上げる時には、種々養生のこ
ろ思ひ……夕暮の客 三〇

となど書いても、屹度露子さんが背いて下さると思ふから何んですけれども、これがね、
兄となると、云へることも云へなくなるんですよ。」

「そんな筈はないぢやありませんか、貴嬢のやうに元氣の可い方が。はゝゝゝ。」と無頓着に
高笑ひをして、故意とらしからず、

「露子さんと云へば、縣君は今日露子さんの宅へ参つたのぢや御座いませんか。何でも月
岡さんに用事があるやうな話もあつたのですが……。」とたづねて見た。

「私は散歩かと思ひますよ。何とも云置いてありません。それとも阿母様に云つて
あるのかも知れませんが。ぢや訊いて見ませう。」と立上つたが、直に母を先立て、
歸つて来た。

挨拶もそこへ、母は膝近く座を占めると、酒匂に向つて語り出した。

「何ぞ急ぎの御用事でもあんなさるのぢや御座いませんか。いえね、斯うなので
御座いますよ。先程貴所が来下さいました時、少し家の事について相談してゐました
ことがありまして、それが心配になつたやうでしたが、話中途に貴所の方へ座を立つて参
りましたさう、茶の間には来させないで何處ぞへ行つたので御座いますよ。散歩にしては少

し長くなるやうだし、私もね、實は氣遣つてゐたとこなんですよ。」と述べたが、不審さうにして、

「あの貴所に何ですか、月岡へ行く用事でもあるやうなこと申してをりましたか。」と峰子を振り返つて、「たしか、峰さん、あなたがさうも聞き申したのだつたねえ。」

「え、さうでしたの。さう仰つたわねえ、酒匂さん。」と峰子は酒匂を促した。

「はい、今日と云つて決まつた話のやうでも御座いませんかつたけれども、何でもそんなこと縣君云つてゐましたやうに記憶しますが……。」と稍曖昧な口調で答へる。

「さうでしたか。月岡へ行く用事と云ひましても、私が知らないことでもありますまいが……。あの用事は何だとも云つてはをりませんかつたでせうか。葉山の話などしてをりませんでしたらうか。」

「いえ、用事は何とも聞きませんやうですが……。或は聞きましたかも知れませんけれども、只今何とも覚えてはをりません。併しその何です、葉山の話と仰有れば、露子さんのことは種々御心配のやうに承はつてをりますか。」

「え、心配つて何をて御座いますか。露子さんのことなのですか。」と母は思はぬ所に好い探索

相思想……夕暮の客

の意を發見したと、覺えず首を突出した。

「それも委しい事情を伺つたのでもありませんが、つまりア御病氣や何かと縣君の氣掛りになつたものと見えますよ。」と成るだけ廻りくどい云ひ振であるが、何處やらに事ありげにも聞こえるのである。縣の母は物足りないやうに思つて、

「ですけれども貴所、露さんの病氣も只今ぢや病氣と申します程のことでもありませんやうに聞きますから、氣遣ふにも當らないですものね。小さいことを氣にして困つて仕舞ひますよ。」と云つたが、案じ着いたやうに言葉を変へ、

「それであの結婚のことに就きまして、不足がまじることでも申してゐたのぢや御座いませんか不知、そんな様子は致しませんでしたか。……さうく、未だ貴所には御披露も致しませんでしたね、ほ、ほ、私一人で合點をして。あの今度こんな話が出来たので御座いますよ。貴所からも能く勘めてやつて下さいませよ……。」と語り繼がうとするのを、酒匂は遮るやうに、

「縣君の結婚ですか。先達で能く承はつてをりますよ。何より縣君の爲に祝着至極のことです。」と聲を張つて愉快に語つた。

相思想……夕暮の客

「さうでしたかねえ、ほい、ほい。それに就て何を申してをりませんでしたか不知。」

「その何です。僕は此上もない良縁だからつて大に賛成の意を表して置きました。露子は彼でも未だ早いと云ひましてな。何うにもその、露子さんを嫌つてゐるやうぢやありません。餘り進んだ氣色でもありませんでした。一身上の事情が今では結婚を許さんやうな話でした。僕は世の中の活動の上には、左程影響もすまいと懇々話しては見ましたが。併し愛度いことですから早く済ませたいものですな。」

母は聴いてゐて不思議に思つた。縣が自分に語つた所とは大分相違がある。酒匂の話だけならば、こんなに氣遣ふこともなければ、我儘なと縣を責むることは出来ぬ。露子を嫌つてゐないだけでも、どんなに氣が安まるか知れないのである。本當に酒匂の云ふ通りなら、困難はないけれども、何だか頼もしくもあり、氣遣はしくもある。少し聞糺して見なければならぬと、膝を進めた。

酒匂は又縣は何處に行つたらう、散歩ならもう歸りさうなものなのに、何でも今一度逢つて心中を確めて置かねばならぬと考へてゐるので、此場の話には餘り實が入らなかつたのである。態の可い出鱈目もさう長く云つてをられる場合ではないのである。いや、迂

相思怨……夕暮の客

潤なこと喉舌つては、尻が割れる氣遣ひもあると心に思着いゐた。

夕暮の影が迫つて、冷たい風が庭に荒れた。何時か薄暗くなる。峰子は洋燈を傍附にと立つた。縣の母に差向つて、酒匂は退屈さうにした。

「阿母様、大變よく、お客様ですよ、月岡の小父様がいらしてよ。早く、もう此方へいらッしやるわ。」と慌てながら呼んだのである。

「えッ、月岡の小父様ですつて。露さんの阿父様ですか。何うして今頃いらしたんでせうねえ。」と聲に應じて母も立上つた。驚愕に顔の色も變つてゐる。酒匂も呆れたが、ゐてもよくあるまいと暇を告げた。露子の父が何の爲に今頃訪ねたのであらうと、それも氣掛りの一つとなつて、何だか胸が騒いでゐる。

縣の苦悶

十五の一

月岡家を辭して、縣は殆んど夢中になつて方角をも定めず、足の向ふに任せたのである。

惱まじさに胸は痛み、愁ひに顔が沈んでゐる。茫然として知覚を失つたものゝやうに、往來ふ人に幾度か突當らうとした。そして何處を何う出たものであるか、一時間の後には茶町を淋しい池の畔に出て、不忍をついて廻つて、東照公の山を潜つて公園の廣場に疲れ切つた體を投出すやうに腰掛に凭れたのである。

腕を組み頭を垂れ、さも元氣無さうにくつたりとして、足を踏開いた儘、冷たい風に吹かれてゐたが、何を考へるのであるか、宵の口ながら人氣なき境に誰を憚ることのないのに、手を顔に當て、堰き敢へぬ涙に咽んで泣いたのである。如何なれば斯ばかり意氣地なく心の迷ひを去ることの出来ないであらうか、如何なれば斯くも女々しき愁ひに思ひを斷つとの出来ぬであらうか。我と我が決心の堅固ならぬを叱つて、一度は勇氣を奮つて事の處決にたづさはりながら、又しても「斯る心弱さを繰返すとは、何といふことであらうぞ。それと覺悟を決めてゐながら、何故こんな泣きたい思ひをするのであらう、何故涙が出るだらう。縣は身を悶えて、苦痛に堪へ兼ねて絶叫せうとしたのである。胸は波立つて動悸が激しく、一時に全身の張が抜けて、呼吸が迫まるやうに覺えた。

考へて見れて、それも今更何うすることもならぬのである。事態は既に自分の決心の定ま

相思怨……縣の苦悶

相思怨……縣の苦悶

らぬ程、不確實ではない、自分は今の先露子の父母に向つて何と云つたか、何と宣告をして來たか。自分の心弱さは口づから云ふだけのことを悉くことは出来なかつたけれども、自分はこれに代る露子の手紙を置いて來たではないか。さうだ、手紙を置いて來たのである。露子の手紙は千萬言にもまさる立派な宣告書である。月岡夫婦は露子の手紙を讀んでどんな思ひをしたであらう、どんなに感じたであらう。意外にも思ひ、嘔呆れもしたであらうが、自分と露子との間の、逆も再び繋げるものでないと知つたに相違はない。繋げるものでないと知つたら、諦めるより外に道はあるまい。何うすることが出来やう。それだけでは自分こそ物足らぬ思ひを残すかも知らぬけれども、さうなれば露子の父母は自分が一旦の決心通、露子の所思を叶へてくれるに相違はない。全く相違はあるまい。露子も喜ぶだらう、司馬も自分に謝するだらう、酒匂も此事に氣を揉んでくれる一人、屹度自分の公明を贅してくれるに違ひはない。そして、そして自分はこれで満足させねばならぬ！この上の満足を求めてはならぬ！求めても得られる筈はないのだ！求めるのは不道理を免かれぬ！！

自分は斷々乎として克制せねばならぬ。

縣は遺方もなき苦悶に聲を立てやうとしたが……

あゝ、これも自分の運命かも知れぬ。自分が當初の意氣は決してこんな苦惱を重ねる爲のものではなかつた。決してこんな私情に驅られるやうなものでなかつた。斯くも理性を索亂し、斯くも意氣地のないものでなかつた。斯く想到つて、縣は熱い涙が油然として湧くが如きものがあつた。

て、暫時は知覺を失つた者のやうに茫然としてゐたが、林に騒がしき風の音に辛うして我に返つた。涙を拂つて屹と立上つたが、物を思ひながらふら／＼して當途もなく逍遙つたのである。そして不圖氣が附いたのは、あの手紙である。考へれば誠にあの手紙は露子に
は大事の秘密である。あの嚴格の父と母とが、それを止むを得ないこととして、果して事もなく見許して置くてあらうか、それは疑問である。あの手紙を見た爲に、露子の品性の下落したのを想像するやうのとはあるまいか、その爲に露子にあらぬ迷惑の掛ることはな
いてあらうか。自分は苦し紛れに抛り出したのであるが、餘り突飛に過ぎたやうでもある。
いや、今となつては思慮のない仕方であつたに相違ない。さう思ふと縣は立んだ儘、悚然として身柱寒くも覺えたのである。縣は又も惱ましさに驅られて彷徨き初めたがこの儘

相思怨……縣の苦悶

相思怨……縣の苦悶

に打捨て、置いては、露子に對して如何にも濟まなくなつて、心が太く咎められた。思へば思ふ程氣掛りてならぬ。

縣はこんな處にまご／＼してゐてはならぬと氣が着くと、喫驚したやうに急いで廣小路の方へ歩き出した。

不意と此時背後から進み寄つて、軽く自分の肩を叩いたものがある。驚いて振り返つたが、思掛なくそれは酒匂であつた。

「君、君、どうしたんぢや。こんな處に何をしておたんだ。」と酒匂は冷やかに笑つた。

「さう酒匂君か、誰かと思つて僕は喫驚したよ。今頃何處へ行くんだね。」と縣も強ひて笑顔を
をつくつてそれとなく装ふた。

「君こそ何處へ行くんだ。何、歸るのだと。だから、何處へ行つての歸りがけだと訊いてる
のだ。」と酒匂は森し掛けて、

「君には少し話したいともあつたんだ。可い處で逢つたな。なに僕はこれから根岸迄行くの
だが、それぢや少しこゝいらを散歩しながら話すとせう。實は僕あゝ云つて君と別れたが
何だが君の様子が變だと思つたものだから、歸つても氣になつて氣になつてね、それで到

頭今の先わざく君の宅迄行つて来たんだ。ところが君は留守で一向行先が不明なものだから、少時待つて見たが、仕方がなくつて引返したのなんだ。それにつけての話なんだが……。一體君は何處へ行つたんだね。」と肩を擦れく静かに足を運びながら語るののである。「僕は君が歸ると直に曙町へ出掛けたのだが。月岡を訪ねて話をつけて来たのさ。散歩がてら上野へ廻つたんだよ。」と如何にも氣が進まない様子である。

「えッ、月岡へ行つた？。馬鹿に又思切能く早かつたぢやないか。」と我を忘れて雀躍して、「そして何かね、一件を持出したのか。様子は何うだつたね。」とうるさく顔を突き寄せたが、氣が着くと飛退いて、氣取られてはならぬと用心深く故意を聲をしづめ、しやんと胸を張つた。

「併し君もそれを云ふには辛い思ひをしたらうねえ。露子さんの御両親も嘸驚かれたことだらう。君の心中は僕も察するよ。司馬や露子さんには、全く君は生命の親も同然だ。終生の恩人なんだ。それでも御両親は君の云ふことを肯入れてくれられたらうな。それア君、何れにしても決して心持を好くされるといふ筈はないのぢや。只君の意を諒とさればそれで可いんさ。其以上は望まれないことなんだもの。何うだつたね、肯入れて下さつたの

相思怨……縣の苦悶

かね。」

「肯入れてくれるか何うか、それは未だ分らん。はつきりとした返事は聞かなかつた。」

「だけでも、それぢや一向要領を得ないぢやないかね。折角の君の決心が無駄になるのぢやないか。それぢや君、何時迄も心苦しいばかりぢやないか。」

「それも斯うなれば止むを得ないんだ。僕は何事も天に任せやうと思ふ。」と縣は悵然として天を仰いだ。酒匂は呆れながら慌て、

「ぢや何かね、君は話さなかつたのかね。え、話さなかつたのか。今さう云つて置きながら驚いたね。君、何うかしてゐるやうだぜ。心配だね。」

「いや、決して君の心配には及ばん。又驚くにも當らないんだ。僕は何うもしやしなう。」
「だつて、それぢや話しが前後矛盾するぢやないか。」

「僕はね、種々言葉を盡して利害を説いたのだけれども、妙に疑られて話もそれが爲に決着迄進まなかつたのさ。僕は非常に勉めて辯解したが、逆も先方の疑ひを解く譯には行かなかつた。」

「疑ひ？ 疑ひとは何だね。」と急込んで云ふ。

相思怨……縣の苦悶

「いやね、何でも僕が露さんをいやになつた爲に、おためごかしにこんなこと云つてゐるのだと。一も二もなく取られて仕舞つたのさ。君、さうなれば何うも苦しくてならん……。」
「さうだらうともね。ない腹を探られるんだもの、それぢや苦しみに決つてゐるよ。だが馬鹿々々しい邪推ぢやないか。」

「で、僕は歸りがけに手紙を置いて来た。これを見てとつくりお考へ下さるやうにつてね。」
「手紙を置いて来た。」と酒匂は思はず聲を立てたのである。手紙！手紙とは自分が縣に與へた露子の手紙ではあるまいか。自分は全然手紙のことを忘れてゐた、先方に見せよとて縣に與へたのではなかつたのに……。猶そんなことで司馬と露子によからぬことのあるやうに月岡夫婦に取られては、自分の考案がうまく運ばない基だと、少からず驚いたのである。で、言繼いで、

「手紙つて君、露子さんの手紙ぢやなからうねえ。僕が君に與へたあれぢやなからうねえ。」
「あれだよ。露子さんのあの手紙だよ。僕は屹度、あれを見られたら、少しは考へ直されるよ。とだと思つてゐるんだ。」と縣は平氣に物語つた。酒匂は顔の色も眞蒼に、眼が鋭く輝いた。」

相思怨……縣の苦悶 三

十五の二

剝那酒匂は口にくそせね、心中には少からぬ不穩を感じたのである。けれども今更縣を責めても益に立つことでない、それよりは善後の策を講ずるのが大事である。で酒匂は一時顔の色を變へたが、さう考へ直すと直に平氣に復して、

「さうか、置いて来たものは仕方がないとして、そこでだが、君は何う思ふね、果して其手紙で露子さんの御両親を動かしたと思ふのかね。或は悪く司馬や露子さんの身に災難を残したやうなことにはならないのかね。君に其邊の考へのない筈もないのだが、僕聊か氣が採めるね。何うだらう。」と深切らしく語つて、縣は何と返答するかと其顔を偷み見た。「縣は全く返事に窮して仕舞つたのである。酒匂に注意せられて殊更に露子や司馬の身の上の事が心許なく思はれた。縣の顔には見る／＼當惑の色が浮かんで、胸には云ひ知らぬ愁ひと氣遣はしさが徂徠した。力なく手を垂れて唇を結んだ儘、我知らず歩みを止めて、微に溜息吐いたのであるが……。」

酒匂は縣が何を思つてゐるかは知ることが出来なかつたが、其弱々しい氣力のない様を見

相思怨……縣の苦悶 三

て、獨り満足さうに領いたのである。そしてあの手紙が露子司馬二人の爲めに不利益ではないかと念を押すやうに繰返して、それはそれとして斯うなつたからには、君は愈決心を堅くしなければならぬ、何處迄も二人の爲に圖らねばならぬ、自分酒匂も出来るだけのことは盡さうと傲語を放つて更に、

「僕は君の意氣に感服するが、君の境遇に對しても同情の念を禁することは出来ん。」と口を極めて熱心に云つた。縣は心細い中に斯る熱意の言を耳にして、涙さへ催されたのである。二人は近い中に又逢はうと約束して、右と左へ立別れた。酒匂は縣の留守に訪ねて、母や峰子と語つたこと、歸り際に露子の父が訪ねたことに就ては、忘れたか、一言も及ばなかつたのである。

酒匂と別れて、縣は物を思ひながら、再び木下閣を縫ふて、とぼくと町に出た。丁度此時分である。家には縣の母が露子の父を見送つて、茶の間に峰子と未だに歸らぬ縣を氣遣うて、荐りに其噂をしてゐたのである。母は歸宅の待遠しさと、又どんな思慮のないことをしはすまいかと、それが氣掛りて、纒かに我子の仕打を詫びて送り出した露子の父が語つた所を胸中に繰返しては、一方ならず心を痛めてゐたのである。傍から峰子は始終慰め

相思怨……縣の苦悶

顔に、母を宥めてゐた。

「ま、何といふ晚いことだらうねえ。一言さう云つても置かないで、本當に何處に行つてな

のかねえ。」と母は少時すると茶棚の置時計を振り返り見て又同じ事を呟いた。

「もう暮れてから除程になると思つたら、八時疾うに過ぎてゐるのだから、可い加減に歸つたらしいことにねえ。」

峰子は辯解でもするかのやうに、

「でも、阿母様、何處ぞ御用事があんなさるのかも知れませんが、もし經てばお歸んなさるでせう。それも屹度遠い所ぢや御座いませぬわ。だつてね、私が兄様の室に行つて見て來たら何よ。帽子も洋杖もそつゝの儘にしてあるのよ。私は近邊の友達でも訪ねて晚くなつてだらうと思ひますわ。」

「それにしても、こんな晚くなるのなら、一旦は歸るのが本當ぢやないかね。それとも歸りにくいのかも知れないけども。阿母様にこんなな氣を揉まして置いて……。」と母は待ち草臥れて、不平たら／＼である。峰子は覺えずほくと笑はうとした。

「阿母様は本當にむづかしく仰有るから、兄様も困つてよ。それで断りなしに今日もお出掛

けなさつたのかも知れないんですわ。も少し待つて見ませう。又それより外仕方がないんだもの。」

「串戯ではありませんよ。そんなに待つてゐられるものですかね。それに近邊なら何故月岡の小父様など遠い所を訪ねて、あんな我儘の云放題云つて来るのですね。そんな法が何處にありますか？」

「我儘つてどんな我儘？ 私にそんなこと仰有つても、些少も私は何の事だか分りません。」

「だから、兄様が早く歸れば可いと云つてゐるのですわね。」と不機嫌極まつた挨拶。峰子は今夜の母の調子が變だと、小さくなつて用心をして、縣が早く歸れば可いと念じてゐた。途端表戸に人の氣勢がする。峰子は耳を澄ました。

十五の三

それは待ちに待つた縣が悄然として歸つて來たのであつた。

素早く兄の足音を聞附けた峰子は、ちゝ嬉しいと我知らず小走りながら、駈出て懐かしさうにいそいそとして迎へ入れたのである。

相思怨……縣の苦悶

「兄様、あなた何處へいらしたの。阿母様がね、兄様が黙つても出掛けなつたものだから、今日はふりく怒つてらしてよ。私はもう困り切つてゐたんですの。こんなに御機嫌の悪かつたことは、私はこれ迄見たことがないのよ。」と耳打てもするやうに、引添つて従ひながら小聲に云つて、

「本當に阿母様と二人でどんなに待つてゐたか知れませんか。」と氣が落着いて如何にも嬉しうである。

縣は暗闇に立止まつて、障子を漏る、彼方の燈火の餘光に、附纏つて可愛く物を云ふ峰子の顔を凝然と眺めたのであるが、心淋しい現在の身に、血を分けた兄妹の親愛の情が燃え立つやうに覺えて、見交す眼と眼とに閃めくが如き一種の美しい懐かしさの思ひを感じたのである。自らでさへ自らの心に背いて、稍ともすれば我と我が身を淺ましい賤しいものと思做さうとする此頃の縣は、何處迄も單純に自分ばかりを信じやうとする、胸に露程の虚偽なき清き尊き此妹の、些細のことにも斯ばかりの眞實心を籠めて自分を氣遣つてくれるかと其親切を思つては、抱き締めて頬擦もしてやりたいばかりであつた。感謝の思ひに涙が込上ぐるばかりであつた。何うしたのであるか、今日の縣は神經の過敏な感じ強い女

相思怨……縣の苦悶

子を見るやうに氣弱いのである。と。峰子の手を取りながら、

「本當に遅くなつて峰さんにも濟まないことだつたねえ。行く筈ではなかつた上野の方へ迄
いるりと散歩に出掛けたものだから。」と氣の毒さうに優しく云つた。

「そして其前、何處に行つてらしたの。」

「彼方此方二三人、久し振に友人を訪ね廻つたんだ。」

「月岡の小母様宅へはいらつしやらないの。」と峰子はくすぐりたいたやうな笑ひを隠して、白
莫連れて問ふたのである。

「え。」と縣は驚いたが眞面目になつて、

「何故そんな下らないとが聞きたいんだらうね。そんなこと聞いて何にするのだらう。」

「少しね、私が参考にした事があるのよ。兄様がお咎めなさらなくつても可い事なのよ。

可いことよ。ね、月岡の小母様宅へはお奇んなさならなかつたの。」

「今日はね、少し急いだものだから……。」と曖昧な答である。

「ちや、お奇んなさならなかつてね、本當にお奇んなさらないのね。」

「あア。」と生返事。

相思怨……縣の苦悶 三六

「屹度なの。」と何だか物言たげにむづ／＼する。

「あア、奇らなかつた。」と縣は誤魔化さうとした。

「あら、兄様はあんな嘘を云つて……お、可笑い。だつて夕暮に小父様が見えてのお話に、
兄様が彼方の宅へおいてなすつたつてことだわ。阿母様がさう仰有つてゐてよ。」

「え、月岡の小父様が入らしたのかい。それは何時頃だつたの。」と縣は慌て出した。「一
度は顔の色が赭くなり、一度は身頭ひをしたのである。

峰子は笑ひ倒けさうにしながら、

「悉皆私には分つてゐてよ。兄様、あなたは何もそんなにも隠しなさらなくつても可さうら
なものだわねえ。隠すより顯るゝはなしと云ふわ。」

折から茶の間の母は、いらつた聲を振立て、峰子の高聲を制した。

「大きな聲をして、峰さん、何をそんなに巫山戯てるのですね。お歸りなのは誰かい、兄様
かい、兄様ならそんな所にぐず／＼しないで、此室へおいでなさいと、お云ひなさる。」

峰子は掌を口の邊に蔽うて、無理に可笑さを忍んでゐた。縣ははッと思つて、

「阿母様、僕です、次郎です、只今歸りました。何うも遅くなつて相済みません。」と聲を掛

けながら、ちらと聞いた露子の父の訪問が氣にはなるが、其儘急いで茶の間へ入った。峰子もすぐに縣についた。

縣は挨拶もせぬ中から、もう母の氣色に呑まれた。

母のお米は故意とらしく押黙つて、暫時は犯すべからざる顔色に、縣のせんやうを打守つてゐた。義立つやうな胸の思ひを、何と打出して可いか分らないのである。漸う言葉を繕つて、

「次郎さん、あなたは月岡の小父様に何を云ひに行つたのですね。」と物靜かに訊ねたが、唯これだけの言句の中にも、何處やらに尖々しい針を含んだやうな響きが混つて聞かれた。縣は首を縮めて差控へたのである。

「え、何を私に隠して申上げたのです。」と重ねて云つたが、それでも縣は口を噤んで、緘黙を守つてゐた。峰子の言葉に月岡の小父様が夕暮家に見えたと云ひ、今この肚腹の中をも見透したやうな母の間ひやうに、前後を綴り合せて考へれば、何うやら月岡夫婦の面前で自分の語つたことが、早くも母の耳に入つたものやうである。それにしても露子の父はあの手紙を何と思つて讀んだであらう、家に來て何を母に語つたのであらう、母の唯なら

相思怨……縣の苦悶

三〇

相思怨……縣の苦悶

三一

ぬ様子から推せば、恐らく自分の本意が了解されずに仕舞つて、露子の手紙も自分がこしらへもしたものの如く邪推をされて、それが其儘母の耳に移されたやうでもある。それと云はれば、又云解く術もあるけれども、心の中は何とも分らないのに、輕卒物を言つて、どんなに怒りを増すことにならうも知れぬ、氣遣に徹な母の平生を知つてゐるだけ、怒らせては理も非もないと考へたので、殊更答辯が出來悪いのであつた。

「何故あなた、そんなに黙り込んでゐるのですね。阿母様にはどんな心配を掛けても可いとあなたは思ひなの。」と母の聲は何時かうるみを持つて、

「それはもう、私には唯一人の大事なあなたのことであれば、よしんばどんな心配をしたからつて、決して阿母様はね、それを兎や角云つてゐるのではありませんよ。云ふつもりではありませんよ。だけど、あなたの我儘勝手が阿母様の前に通らないからつて、それを直接に月岡の小父様へ持つて行かうといふのは、餘まり大膽過ぎるぢやありませんか。何といふ母を見縊つた仕打です。あなたはそんなことをしても疚しいとは思ひてないか知らなけれど……」と思切つて腹立たしく云はうとして心に任せなかつた。縣は倍はと胸を潰したのである。

「あなたに未悪かれと思つてなら、阿母様はね、決してこんなあなたの氣に入らないことを、朝から晩迄つへこへ」と云ふのはありません。あなたのなさることに、關つたことではないと思ふのなら、何を氣を揉むのですか。阿母様の面目は傷ついてもかまはないけれども、あなたの體はこれからの世間ですよ。人に指てもさくられるやうなことがあつて済みますか。何事でも少しは考へてなさるものです。」と聲を額はして、

「月岡の小父様にも云ひのこと、こゝで白状なさい。黙つてゐることは出来ませんよ。」
縣は胸に手を加へて思惱んだが、咄嗟に考へを決めて振仰いだ。

「もう何も彼も御存知のやうで御座いますから、決して隠しは致しません、阿母様には事が落着きました上で、改めてお詫を致す氣で御座いましたけれども……。僕は決して、決して前後の考へを無くして月岡へ參つたのぢや御座いませぬ。あなたに申上げてお返しも聞入下さるやうに思ひませぬかつたので、さればと云つて外に今の所途がなかつたものから……。僕は阿母様の御慈愛は夢にも忘れは致しません。」と肺腑を曝け出すやうに熱心に語つたのである。そして月岡を訪ねての一伍一什、露子には愛する人があつて、それを強ひて自分の爲に引着けて失望させるのは良心に慙づべきである、搦て、露子の愛人は

相思怨……縣の苦悶

三三

相思怨……縣の苦悶

三三

親友の司馬であること、自分は既に二人の爲に事を圓滿に運ぶやう盡力しやうと約束してあること、事情が長く猶豫すべきでない理由を細かに物語つた。母はそれもこれも初めて聞いて驚きもし呆れもし、果は口惜しくもなつて、云はんことよりは、先づ尋るゝは涙である。峰子も呆れて聽いてゐたが、露子にそんなことがと惑つても見た。

「てすものね阿母様、僕の苦しい思ひはどんなだか分りませぬ。僕は何う身を處してよいか知れませぬよ。」と悲愴の感慨に堪へないやうに云つたが、遮つて、

「いゝえ、あなたはなさるとを間違へてゐます。そんな得手勝手の理屈が何處にあるものですか。」と母は向直つて打消すやうに云つた。

「露さんも決してそんな道理に合はないことをなさることは出来ませんよ。それぢや、月岡の小父様や小母様が、何日そんなことなさいつて露さんに仰有つたことがあります。司馬さんも司馬さんぢやありませんか。両親の許可を得ないで、そんな無鐵砲なことの、何日迄通されるとお思ひか知らないけれども、尙両親が監督をしてゐる人の娘に對つて、何といふ氣でせうか。だもの、それをあなたが氣の毒がつて、阿母様の吩咐に反かうといふのは、全然道理の分らない人達のことなんですよ。あなたにしても露さんにしても、そ

んなこととせやうつて學問をさしたのぢやない。私はね、學問をした人は、も少し立派な考へになるものだと思つてをりましたよ。月岡の小父様も今日いらしつて、無教育の者にもあるやうな、そんな呆れたことが露さんにあらうとは思はないけれどもつて、氣遣つてゐらしたんだもの。私だつて同じことだらうぢやありませんか。露さんに限つて、まさか／＼そんな墮落をなさらうとは考へられません。あなたがそれをたつても本當だと仰有るなら、阿母様はあなたを信用するが出来ませんよ。いゝえ、話も想像もつかないとなんだもの。」と頂邊からけなしてかゝつて、

「よしんば、あなたが云ひのやうなことのあつたにしても、何うして親がゐる露さんの氣儘にさして置くことが出来るのですか。あなたは其處に義理でもあるやうにお云ひだけれども、世間の義理といふものは、そんな可笑なものではありませんよ。あなたは黙つてゐれば可いのですよ。露さんのことには、歴平とした御両親があんなさるのだから、あなたを差出口を利くといふことにはないのです。」と意見がましく云つたが、固より眞情は其間に溢れてゐた。

縣は當惑して口が利けなかつたが、沈み切つた悲しげの調子になつて、

相思怨……縣の苦悶

三三

相思怨……縣の苦悶

三三

「併し阿母様の仰有る通りばかりも世間は行かなからうと思ひますよ。僕は一旦誓つたことを忘れて仕舞ふことは、到底出来ません。僕は好んで阿母様に逆らはうとするのぢやありませんけれども、露さんの意思を盾けることは、僕として何うしても出来ないのです。」と思詰めたやうに、一方の手を器に着いた儘、顔も上げ得ず、辛うじて云つたのである。

「それぢや、やつぱし阿母様の云ふことを背かないといふ氣なの。ま、あなたは何故さう間違つた剛情をお張りだらうねえ。」

「だつて阿母様が御無理仰有るぢやありませんか。僕はそんな氣ぢや御座いません。」

「ぢ黙んなさい。」と母は語氣強く云つて、簇々と抑へた怒りが迸るやうに、はや血相變へた。

「あなたも縣の家に生れた人ぢやありませんか。學問も相當にしてゐながら、何故さう分らないことを云ひますねえ。阿母様はあなたのお云ひのことは聴きませんが、あなたはあなたでなさりたいやうになさるのです。」

母は赫と逆上せたやうに、つゝと立上つて室を出やうとした。縣もむツとして見てゐたが、唯、はらはらと氣を採んだ蜂子が、傍から腰を浮かして、突如袂に絶つて引止めたのであ

る。母はそれをも振拂はうとした。

「鳥渡待つて、頂戴よ、あれ、兄様早く……。」

「あなたが何も知りのことぢやありません。兄様はね、どんなに阿母様を困らしても、どんなに不幸をしても、それで済むのだと思ひだから……。阿母様は何うしてこんな不幸福だらうねえ。」とはらくと涙を垂れて、よろ／＼として再び其處に膝を突いた。縣も噎上げたのである。

「あんなこと仰有つても、兄様は阿母様の仰有る通りなさるのよ。兄様、あなた何故剛情張なこと仰有るのよう。」と峰子は涙含んで、

「あなたには屹度阿母様の罰が當つてよ。」と怨めしうに兄を見て、突寄つて母の氣を安めやうとした。

縣は口の先ばかり強いけれども、心は弱り果てゐた。餘りのことに腹も立てたが、自體は自分が悪いのである。濟まないこと悔いては居堪まらず、「阿母様を差置いて、僕から小父様に申上げたことは悪う御座いました……。」と詫を云つたが、後は涙に咽んで聲が出なかつた。

相思怨……縣の苦悶

三六

相思怨……清き涙

三七

母の機嫌を取直すことは出来なかつたが、今夜は晩いから明日朝早く、月岡にも今日の始末の詫に行くからといふので、一時を繕ふことが出来た。縣に心にもないこんな詫が云へるであらうか。

清き涙

十六の一

司馬が露子を夜葉山に送つてから、二人は急に親しい間となつて、相互の文通も漸く頻繁を極めたが、十日と日数の経ぬ中に、司馬は鎌倉を引拂うて葉山に寓を移したのである。畑、土橋、野徑を隔て、松林の片はづれに、月岡の別荘とは稍斜違ひに對ひ合つて旅館の二階の一室である。此事は尙縣にも知らさなかつた。酒匂ばかりは二人の様子にも、露子の手紙にも、あるべき事と豫期してゐたのであるが……。

それといふのも固より露子の熱心なる勧誘をもだし兼ねたからである。司馬の頭にも世間といふことがあるからには、後影の心地がしないでもなかつたが、自分の精神さへも腐らなければ、非難される理由はないと自ら通路を見出して、露子の旨に従ふたのである。

うなれば司馬自身にも新しい希望や楽しみが出て来るので、何となく気が浮々として、唯の一日も待つてゐることが出来ないであつた。

二人は訪ひつ訪はれつして、楽しい希望を語り、互に心を盡し合つて同じ日を繰返してゐたが、二人の間には流石に今も薄絹程の懸隔が置かれてあつた。二人の感情を憚りなく云へば、身を捨て、もと思ふばかりの熱愛に達してゐたのかも知れぬけれども、自ら守る所を守つて、手を握合ふことがあつてもそれさへ懼るゝてあつた。お金は露子を信ずるとの深いだけ、二人の交際を左迄深くは考へもせず、露子が此頃の機嫌の、勝れると云ふ程ではなくても、少しは晴やかなと思はれるのを喜んで、これも淋しい住居に新しい友達が出来たからだと、密かに司馬を徳としてゐたのである。

今宵もお金共に三人が三ツ鼎に火鉢を圍んで、四方山の雑談に夜を更かして興に入つたが、時計の十時を報ずるのに驚いて、今しがた司馬は匆惶として別荘を辭した。送出して締りをした後は、俄に家の中がひっそりとして、隙を漏れて夜寒が迫るやうであつた。霜の氣に次第に細り行く蟲の聲々、何處やらにまた残つて、哀れは身に泌みて聞かれるのである。二人は差向つて火の消えかゝつた火鉢に凭掛りながら、話すことにも盡きて、黙り込んで

相思怨……清き涙

相思怨……清き涙

ゐた。時を刻む時計の音が室一杯に響くのである。露子は時々何か思出し笑ひを漏らして、考へに耽つてゐたが、やがて又心配さうに眉根を寄せ、

「金や、縣の兄様は此頃何うしてゐらつしやるだらうねえ。」と思着いたやうに云つた。

お金は火鉢から體を起して、目を睜りながら、

「左様で御座いますねえ。些少も音信を遊ばさないんで御座いますねえ。お忙しくつてゐるししやるからなのでせうと私は思ひますわ。」と何のこともなう。

「だつて、なんぼ忙しいからつて、鳥渡のち手紙位も書さになるお餘暇はありさうなものぢやありませんか。ありさうなものだわねえ。」と露子はつまらなさうにして、

「あんなに何だもの、私のこと氣遣つてゐて下さるんだもの。この前のお手紙は何日だつたらうね。え、何日下すつたの、覚えてゐて。」

「お、ねえ、何日で御座いましたか。」と考へる。

「司馬さんにもお便りはないつて仰有つてだつたわ。兄様御病氣でもなさつたのではあるまいかね。」

「お、かねえ。すけれども何とも申されませんで御座いますよ。あの何ぢや御座いません

か、お嬢様から御手紙をお出し遊ばせば可いでは御座いませんか。そしたら御返事を遊ばすてせう。」

「又私から。」と仰山らしく云つて、

「私からはお前、つい昨日も差上げてあるのだわ。少しお訊き申したいともあつたものだから……。」

「でも、よろしいぢや御座いませんか。たんとお怨みを云つておあげなさるが可うございませわ。」

「そんなことが私に何うして。金やが又何日もの亂暴をお云ひても、私にはさうは行かないのよ。」と露子は自ら慰むる所があるらしく、

「だけれども、昨日のが今日着いたか着かない位なのだから、ひよつとすると、あの昨日も夕方出したのだから、未だ着かないのかも知れないのねえ。」

「それでは貴女、そんなに早くは御返事が参る筈はないでは御座いませんか。」とお金が笑出した時、露子は何物か開附けたやうに耳を傾けて、

「あや、誰か来たのぢやなくつて。お前黙つて……もう今夜は晩いんだのに……。」と

相思怨……清き涙

三〇

不審みながら立上らうとした。

表戸をとんとんと叩く音が連りにした。

「今頃誰だらう、いやだことねえ。」と露子はためらつてゐる。

「本當に今頃何うしたんでせう。」とお金も立上りはしたものの、氣味を悪がつて進み兼ねた。

門外には又激しく戸を叩くのであつた。

「爺やは何をしてゐるだらう。困つたことだわ。」と露子は二三歩玄關の方へ進んだが、お金は茫乎考へて、突立つた儘でゐた。すると早寝てゐたらしい爺やの起出る物音がして、潜門の鍵を外す様子であつたが、直に引返して頓狂聲にお金を呼んだのである。

此時二人は細目に戸を開いて、玄關先迄來てゐたのであるが、けたましく呼立てられて、これは思掛けぬと色を變へて驚き騒いだのである。二人は慌てながら飛んで出て出迎へた。外套にくるまつて、静かに歩み寄つたのは、露子の母であつた。

「阿母様、まア何うして。」と露子は驚きと懐かしみに驅寄つて、

「何うしてこんな遅くに入らしたの。」と母を見る迄の恐れに引替へて、心からの嬉しさを

相思怨……清き涙

三二

包み兼ねて、欣々と彼方此方する。

「何人かと存じましたら。私は全く奥様だとは存じませんで、失禮を致しました。」と金は一方向詫ひながら、手洋燈を持ち出して中腰の其處に跪まつた。

「こんな遅いんだものねえ。私も阿母様だとは些少も思はなかつてよ。」

「急に露さんに用事が出来たものだからね、明日にしようかとも思つたのだけれども。」と母は少しも浮かぬ調子。注意深い目を露子に注ぎながら、連立つて室に入つた。

母は黙つて坐つたが、紙入をお金に渡して車夫に酒手を取らせるやうにと吩咐け、露子が酌んで出した茶に舌を濕して、眺め廻したのであるが、何を見附けたか、急に不快な顔を

して、

「露さん、何人かお客様でもあつたんですか。」と物優しいが聲として問ふた。母の右手の上座には、客布圍がその儘に置かれて、嚙未了の茶碗が茶托に載せて取下げられずにあつた。それと紙裏の空箱が一つ轉がつてゐる。露子もお金も煙草を吸はぬのに、今の先迄誰ぞ来てゐたに違ひない、忌はしい司馬ではなからうか、或はさうかも知れぬと突差に思ひ得て、著しく母の胸は騒いだのであつた。

相思怨……清き涙

三四

相思怨……清き涙

三四

露子は殊更隠さうとも思はないのであつた。少し頬を染めたが頷いて、

「え、一時間ばかり前迄人が来てゐましたの。」と何のこともなしに答へて、

「そして阿母様、私に急な用事つて、どんなことですか。明日にも延ばされないうやうな、そんな急ぎの用事つて云へば何でせう。分りませんわねえ。」

「あなたの用事もだけれども、こんな無用心な女ばかりの家へ夜来る人も、阿母様には分らないんですよ。」と意味ありげに云つて、露子の顔を見守り、

「お客様といふのは露さんのお友達ですか。土地の人なの。」と言衆には圭角がないが、顔は何處迄も眞面目である。

「土地の者ではありません。」と首を横に振つて笑つた。

「あなたのお友達?」と故意と目を欲て、訝かる。

「お友達はお友達だけれども、ま、何と云つたら可いでせうねえ。私と峰子さんといふやうな間ぢやないのよ。兄様と私の間のやうなお友達なの。私からは同等に見ては不可ないのなんだわ。」

「大層難しいんですね。次郎さんといふやうなのなら、男子の方ですね。」

「そ、う、う、う。」と露子は白い歯を見せながら、さう云つた。

母はこれほど血が躍つたが、強ひて齒を殺して、愈物柔かに、云ひ繼いで、

「でも男の方を何うしてあなたは知つてゐます。あなたの交際の廣いには、阿母様は驚いて仕舞つたよ。誰だらう。」

「誰だか阿母様當て、ごらんなきさいよ。あなたも御存知の筈なのよ。」と露子は母の言葉を他意もなく聞いて、ほく／＼嬉しがるのであつた。

「い、え、阿母様はね、夜こんな家へ遊びに来るやうな人は知りません。」と堪へ兼ねたやうに云つて、屹と露子を噴めたので、はッと思ふと露子はもうさつと赧くなつて顔へ出した。お金は室を出た儘かへつて来ないのである。

「立派な精神を持った男子の方ならば、世間ならば兎も角として、夜になぞ、なんぼも友達の問柄でも、若い女子達ばかりの宅を訪ねるやうな嗜みのないことは致しません。阿母様が何うして、そんな人を知つてゐるのですかね。そんな人はね、あなたも用心をして交際しなければ、あらぬことでも世間の人から云はれますよ。何と仰有る方が知らないうけれども、立派な、感服の出来るやうな人ではないやうに思はれるぢやありませんかね。」と母

相思怨……清き涙

三四

相思怨……清き涙

三四

は噛んで合めるやうに愛情の深い言葉であつたが、胸には失望と悲哀の深い霧が下りて、見る間に顔の色が眞蒼に變つて仕舞つたのである。家に入る其迄、まさか／＼そんな汚らわしいことはあるまい、萬一にもあつたなら、其時こそは父にも云解く術はない、自分が間に立つても何う怒りを宥めることの出来やうと、疑いと懼れとの間に、猶幾分の光明があるやうに思つて来たのであつたが、如那も如斯もと夜氣を冒して来る途すがらも、露子の爲に考へたことの、疲れ切つた體を纒かに室に落着かした迄の數分間を隔て、悉皆一時の空想に歸して仕舞つたと覺つては、例へやうのない悲痛なる感慨に、胸を裂かれる思ひをしたのである。

母は辛うじて涙を見せなかつた。

「ね、あなたは伶俐だから、能く分りましたらう。あなたが交際をしやうと思ふ程の人ならば、決してもう此方の迷惑になるやうな人でなからうと思ひますから、阿母様も自分て知らないからつて、好んで無闇矢鱈の不賛成をせうと思ふのではありません。けれども、人と交際をするのにはね、能く對手の人を選んだ上でなければなりませんよ。表面ばかりでは善い人か悪い人か區別はつきませんよ。あなたは次郎さんのやうな人だとお云ひだけ

ども、こんな夜中に訪ねるやうな人ならば、大概人柄も分るてはありませんか。阿母様はね、他に良いところのある人だとは思ひますけれども、威服は出来ませんよ。」と深く鋒芒を襲んで、出来る間は露子の心を繋いで、自ら悪いことを覺らせやうとした。

けれども露子は司馬と自分との交際に、何の用心も入ることだとは思はなかつた。此上もなく信じ合つてゐる間柄であれば、母にても指一本の非難をも着けさせたくはなかつた。又母の注意は對手を司馬と知らないからのもであらう、司馬と知つたら、恐らく思過ぎたと覺られるであらう、司馬の深切なことも知つての筈である、縣も同様に尊敬するといふた自分の言葉も道理のあること、思はれやうと考へたので、母の様子が平常と變つてゐるのには左迄氣を止めて見なかつた。

「ですけれども、阿母様、そんな悪いことのある方ぢや御座いませぬわ。他の人とは違ふんですもの。」と甘へ調子に云つて、

「阿母様は知らないつて仰有るけれども、そんな筈はありませんわ。今夜入らしたしたのは、司馬さんなのよ。」と母の顔をのぞき込んだのである。

「司馬さんですつて。司馬さんだから善い人だつてあなたは云ひなのかい。」

相思怨……清き涙

三三

相思怨……清き涙

三三

「だつて、兄様にもお友達ぢやありませんか。」

「あなたは猶そんなことを云つて、阿母様は司馬さんのやうな立派な方だから、餘計不可いことと思ひますよ。司馬さんのやうな立派な方が何故こんな嗜みのないことをなさるのです。」と母は嚴かに云つたが、何時か涙含んでゐた。

「あなたは司馬さんをどんな人だと思つてゐますの。司馬さんは又、あなたを何と思つてゐらつしやるの。次郎さんのお友達なら猶のことぢやありませんか。あなたも亦少しは自分のこと考へてごらんなさ。何時迄もそんな考へのないこと何うします。阿母様のあなたに用事と云ひますのも外のことではありませぬ……。だけど、今夜は遅いことでもあるから明日にしませうよ。能くね、あなたはどんな體だか、何時迄もそんな自由にしてゐることの出来る體だか、考へてごらんなさ。」

露子は恐怖の念に驅られて蒼くなつたが、斯く云はれて初めて母の眞意を解したやうに思つたのである。そして此頃縣から音信のないことを思浮かへると、はつと小さい胸を震かした。何うすれば可いだらう！ 露子は何にも云はなかつたが、差俯向くと涙がほろ／＼として膝に落ちた。

其夜露子は遂に眠ることが出来なかつた。どんな體だか考へて見よとの母の言葉の底の意味は何を含んでゐるであらう、自分に用事とはどんなことであらう、他のことではないと云はれたやうであるけれども、何を指して云はれたことだらう、自分の體についてのことであらうか。それならば母が今夜客來と知つて、不快な顔をされたのも萬更解せぬことはない。司馬さんと聞いて氣分を悪がられたのも、何うやら聞こえぬことではない。そして何時迄もこんな自由にしてゐられる躰かと云はれたのも眞意は察せられる。さう解釋して母の氣になれば、さう思はれるのも無理とはばかりは云はれないのである。さるにても縣の兄様は何うなさる氣であるやら、此頃は打絶えて消息もないのである。自分や司馬に約束なされたことは、未だ持出されないものと見える、屹度持出される機会がないからであらう、兄様に限つて自分を困らせるやうなことは決してなさらない、なさる筈はないのである。けれども、何を云つても人の心である。兄様が如何に自分を氣の毒に思つてゐて下さつても、儘にならぬ世の中に、なさらうとすることの出来ないのを早くも知つて、若し

相思怨……清き涙

三二

や思返してお仕舞ひなされたのではなからうか、そんなことであらうとは思はれぬが、音信も何もないのであれば、何とも断言は出来ないのである。假にそのやうなことがあるとするならば、結果はどうであらう。自分は縣の家の者とならねばならぬ、兄様は自分の所天てなければならぬ。……何うしてそんなことの出来やうか、兄様が何うしてそれを承知なさるものか、自分がそれを望んだとしても、到底そんな無理などの出来る筈はないのである。自分如きが縣次郎の夫人として何うして世に立つの資格があらうぞ、兄様がどんなにお困りなさるかも知れぬ。いや、自分とてどんな苦しい思ひをするかも知れぬ。兄様に兄として親しむので、外の思ひはさらさらしないのである。父や母がどんなに強ひられたからとて、こればかりはそんな亂暴な自分を捨てるやうなことは出来ぬ、何うしてもそんな氣にはなれぬ。自分の考へては、母は今もそんな氣でゐられるやうである。兄様の一存で思ふ通りには行かないのかも知れぬ。母の自分に用事と云はれたのが、果してそれであるとして見れば、兄様の此頃の辛氣苦勞が思遣られるのである。自分は音信がないのを心許なくも考へたけれども、兄様の方から云へば、屹度それどころではあるまい。又母の言葉を深く考へれば、何うやら司馬さんと自分との間を臚氣ながら知つてゐられるやうにもあ

相思怨……清き涙

三三

るが、それならば兄様から話が一應は出たものに違ひない。自分とて司馬さんとの交際は決して疚しいこともなければ、殊更恥づべきことも思ひ知らぬ。明日にても母に訊かれ
たら、隠さず、何も彼も物語つて、二人の考へを肯入れて貰へるやうにするとせう、眞意
を籠めて願つて見たならば、兄様といふ氣強い味方もあるとであれば、少しは考へてもい
たゞけやう。さうだ、さう何事も隠さず母に打明けて話した方が立派であるやうに思ふと、
露子は其からそれと八方に思索を廻らして、我と心細いやうな氣にもなり、悲しくも泣き
たくも思つたが、考へてゐる中に、何うせ一通りや二通りの困難は止むを得ないこと
ゝ思定めて、再び希望を心中に描いたのである。右左枕を交はして睡らうとも努めて見
たが、夜が明離れる迄轉輾して、徒に神經の亢奮を増すばかりであつた。
露子が起出た時には、もう勝手に母の聲がしてゐた。母も餘り睡らなかつた所爲か、恐
ろしく蒼褪めた顔をして、臉が腫れ上つてゐるやうである。露子も氣分すぐれず、何とな
く萎れ返つてゐた。互ひに淋しく朝餐を済ましたが、相對して話すことが些少も冴えない
のである。

さうかうしてゐる中に、お金が取次いで、司馬さんが入らしたと知らせた。母は一時に

相思怨……清き涙

二二〇

相思怨……清き涙

二二一

険しい目の色をした。露子は何として可いやら當惑の外になかつた。お金は仔細のあるこ
ととも思はないので、敷居に手を突いた態で、

「此方へも通し申しませうか。いかゞ致しませう。」

「あの、それぢやあちらへ。私の書齋の方にして置くれな。」と何となく母に憚つて力無く云
つたのである。母はこれには何とも云はなかつた。

十六の三

露子は司馬の訪問を折悪くと思はぬでもなかつたが、昨夜考へた如くに、一層母にも二人
の間の事情を語つて、肯入れて貰つたならば、却て其方が自分等の幸福ではなからうか、
それと語らねばこそ、種々と苦しい思ひもせねばならぬのであれば、一旦斯うと打明けて
置いて、其上での足らはぬ所、自分の口で云へぬ所は、兄様の言葉を藉りても可い筈と考
へて、自分の書齋に通させたが、目に見るやうな母の不機嫌な様子を前に控へては、何と
なく憶れが先立つので、幾度か腰を浮してもちもぢしながら、どうしても座を外す勇氣が
出なかつたのである。

母は露子の云ひ出し兼ねてゐる様子を早くも推察して、それでも知らぬ顔の、

「お客様があるんですか。」と外方を向いて云つた。

露子は努めて笑顔を造りながら、

「え、昨夜の司馬さんなの。」

「おや、司馬さん？ 能く入らつしやるんだと見えますね。そんなにまあ、御用事がおあんなさるんですか。」

露子はむツとして答へやうとはしなかつた。

「阿母様は又、あなたがそんなに昵近くなさつておいてだらうとは、思つても見ませんかつたのに。昨夜の今朝、朝晩に用事が絶えないやうでは、随分だねえ。」

「い、え、用事つて云ふがものは御座いませぬわ。司馬さんからの御用事つて云つては、滅多にないんですもの。かうして司馬さんから入らして戴くのも、悉皆私がお願ひ申して置いたからですよ。」と露子は餘りに思遣のない母の言葉と、情なくもなつて来て、司馬を掩護ふやうに云つたが、母は只冷かに露子を眺め遣つたばかりであつた。

露子は誠に云ひ知らぬ辛い切ない思ひをするのであつた。例にもなく司馬をこんなに待た

相思怨……清き涙

相思怨……清き涙

して置いて、何と思はれやうと氣にもなる。さればとて母の不機嫌なのを心に止めないやうにするのは、更に忍び得ない所である。あの情深い慈悲深い自分の母が、何を感じて此度に限つて、こんな冷たい心に自分を迎へるのであらう。自分には何う考へて見ても、さうされる覺えはないのである。母の仕打を怨むやうな勿體ないことをしやうとは思はぬけれども、我知らずつい情なくもあり、悲しくもないことはなかつた。

露子は母にこんなこと云はれもし、又こんな不快な顔をされたことがないと考へては、心細く便りないやうに思つて、つまされたやうに悲しく變な氣持がして來ると、ほろりと一雫、清い涙が睫毛を濡れた。心慌て、そつと押拭つたが、女々しくはならぬと思ひ定め、たもの、やうに、手を上げて髪面を抑へると、屹と振仰いだのである。そして愁はしいが中に淋しい微笑を浮かべて、

「實はあの私は司馬さんに教はつてゐることがありますのよ。戯曲の講義をして戴いてるんですの。ほら、此間文學座で新派が演じたハムレットの原書の講義なんですよ。私は葉山にゐて到頭見物が出来なかつたけれども、大層面白かつたつて、峰子さんのお手紙にもあつたので、それで急に讀んで見たくなつて何しましたけれども、難しくつて到底私の力で

は十分の意味が取れなくつて困つた揚句、あの、司馬さんに講義をして戴くことにお願いしたんですよ。今朝もそれでわざ／＼入らして下すつたんですわ。」と少し考へ、
「私、鳥渡彼方へも目に掛りに行つて来て可いよ。ね、鳥渡ですから阿母様。」と縋るやうに云つた。

「ようございませうとも、たんと行つてらつしやいよ。阿母様に仰有る迄もなほはありませんか。」と母は露子の言葉を全然信用しないで、云ふが儘にと自暴氣味に答へたのである。「さう。」と露子は唯一言、何を云つても駄目と諦めて、すつと立上つたのであるが、遺瀨なき思ひに胸を抑へて、じつと沈み切つた顔を振返ると、悲しい眼を瞪つて、つんと濟ましてゐる母を見た。母は傍を向いて、顧みもせず黙つて煙草を吹かしてゐた。もう堪らなくなつた露子は、身を投出してあはや泣かうとしたが、踏締めて彼方に向くと、ばた／＼と驅出して書齋に入つたのである。そして徒空然として控へた司馬の前に挨拶も、せず机に凭れて、突伏すとわつと泣聲立てた。司馬は驚くまいことではない。こはそも何事のあつてと、呆れながらも擦り寄つて、露子の肩に手をかけて、

相思怨……清き涙

三四

相思怨……清き涙

三五

「何うなさつたのです。露子さん、え、露子さん貴嬢何うなさつたのです。」と揺ぶつた。露子は言葉もなく、顔も上げ得ず、よ／＼と泣き沈むばかりであつた。

司馬はどうすることもならぬ。

「何うかなさつたんですか、露子さん。」と司馬は重ねて慰めるやうに覗き込んだが、答へがなすのい。

「ね、何うなさつたのです……。突如泣いてゐらしつては、僕も困つて仕舞ふ……。」「とこれも萎れ返つた。

露子は氣が着いたやうに、辛而面を上げたが、涙一杯の眼を眩し／＼に睨いて、

「阿母様が、阿母様がね……。司馬さん、私は何うしませう。」と顫へた聲で云つた。

「えッ阿母様が……。」「と鵝鵝返しに繰返して、司馬は意外に又もや打驚かされた。

「何ぞ阿母様から御心配の手紙でも下さつたのですか。」

「さ、え、さうぢやないの、あの昨夜ね、遅く入らしつたんですの……。」「と露子は繼ぎ得な

「あア、さうですか、此方へも越しになつたのですか。さうですか。」と點頭いたが、露子が

何故泣きたいのかは分らなかつた。

「それでは何も泣きになることはなしては御座いませぬか。屹度貴嬢の御病氣を氣遣つてゐて下さつたからなつてせう。大いにも喜びにならなければならん筈ぢやありませんか。」

「いえ、喜ぶことは些少もありませんの。私は何うしたら可いかと思つて、悲しくつて悲しくつて……。」

「それは又何故です、そんな道理はないではありませんか。何か悲しいとても仰有つたといふのですか。」

「それがね、未だ判然とは分らないですけれども、私は何故か氣になつて氣になつて、仕様がないますの。」と纔かに涙を拂つたが、心細さうである。

「僕には分らないですな、悲しいなんて貴嬢、斯うして見舞にと入らして下さるお心に對して濟まなすことですよ。僕は大に感謝しなければならぬことと思ふんです。」と司馬は心から云ふのである。

「それはもうね、私だつて斯うして訪ねて戴いて、嬉しくないことはありません。久振ですに、懐かしくないことはありませんわ。だけど、だけでもねえ、阿母様はあんまりなこと

相思怨……清き涙

相思怨……清き涙

仰有るの……。貴郎に對つても、私はこんなこと申し上げたいとは思ひませぬけれども。」

「あんまりなことつて、何を仰有つたのです。阿母様の仰有ることをあんまりなと思ひなさるのはそれは貴嬢が何ぢや御座いませぬか——貴嬢が屹度獨りぎめをなさつたことなつてせう。」

「いえ、阿母様は私や貴郎のとを妙に疑つて、それではそんなこと仰有るのよ。ね、司馬さん、私等にはそんな非難をされるやうなことのあつた記憶はないんですわねえ。」と露子は又うるんで来た。口惜さうに、

「阿母様があんな厭味を仰有つたことは此迄にだつてないんですもの。私はあんな不機嫌な顔をなさつたのを見たとはありません。未だ判然とは何有も仰有つたのではないけれども何うしても私にはさうとより思へません。貴郎のとも昨夜話に出てよ。今朝だつて貴郎が入らしたつて、お聞きなすつた時のお顔つてなかつたわ。私から阿母様のと彼は申上げられるんぢやないけれども、私は貴郎に考へて戴きたいと思つて、他人になら云はうと思つても、こんなこと云へるのぢやないんだけれども……兄様に申

上げやうにも、何うしてゐらつしやるんだか分かりませぬし、私は何うすれば可いんだかと思

つては……。阿母様はね、屹度私等のを思違ひして考へてのやうですよ。誰かそんな噂をしたのかも知れませんが、人に何と云はれても、私等にはそんなことはないんだからかまはないけれども……。ないことは何と云はれてもないんですわねえ。何も彼も兄様のよいやうにならつて下さる筈なのなもの。それア人が何を云つても取上げないことにすれば済むは済みますわ。だけど私は口惜くも思はれてよ。」とつくづくと語るのである。司馬は覺えず嘆息した。

「それア僕だつて決して疚しいと思ふことはありません。けれどもね、考へて見れば阿母様のお考へも道理かも知れませんが。僕等には世間の口を塞ぐ方法はないのですもの。」と苦しうにして、

「僕はもう決心します。つまり世間の口の葉に掛つては、取返しがつきません。露子さんは暫らくも目には掛りますまいよ。」

「何故、何故そんなこと。貴郎はもうそんなこと仰有つて。」と露子は眼を連睜いて、屹と振向いた。

鋭く感情を刺撃せられて司馬も何時か涙含んだ。

相思怨……清き涙

「百千萬の人が何と云つても、自分の心さへ潔ければ、決して恐れるに足らんとは云つたもの、世の中のとばさるばかりは行かないのです。世の中に行はるゝ風説は取るに足らないものであつても、それをかまはないで置くといふことは、好いことではありませんよ。かまはないで置けば、知らぬ間にどんな損害を蒙るか知れません。風説は固より根も葉もないことですけれども、それを取消してくれる人はいないではありませんか。取消す取消さないは、世の中の人々には何でもありませんけれども、風説をされる者には、生命にも關する大事なことなんです。だから風説だ噂だと云つて仕舞つて、顧みないのは實に危険です。手近く例を取つても、貴嬢の阿母様でも……若し貴嬢の御推察通、誰かによからぬ噂を聞込んで、貴嬢をお疑りになつてたとして見れば……道理は同じことなんです。阿母様にこれと云つて御見届のことはありますまいけれども、又ある筈はありませんが、傍人から何とか云ふものがあれば、さうと邪推をして仕舞ひになるぢやありませんか。人間の關係で第一に親しいものは、なにかと云へば親子です。血を分けた親と子です。貴嬢と阿母様の間を裂くことは、大抵のことではない。それに何うてせう。貴嬢のお考への通りとすれば、出所も分らないの風説が阿母様を動かして、貴嬢との間に不信、疑惑といふやう

相思怨……清き涙

な塊が出来たてはありませんか。親と子が信用することが出来なければ、世の中には信用の出来るものと云つてはありませんか。情ないぢやありませんか。」

露子は術なさうに頭を襟に埋めて、上目遣ひの熱心に司馬を賤めたが、齒を噛み締めて一心に泣くまいと努めた。

「僕も鎌倉から引移る時に、決してそれを思はないではなかつたのですけれども、又まさか貴嬢の仰有るやうな世間の疑ひを招くやうなことのあらうとは考へなかつたのですから、一人てゐては淋しくはあり、貴嬢のお話に任せて、詩文の研究でもしたら、少しは氣の慰むこともあらう、いろ／＼と楽しいこともあらうとばかり。それが考へ先の先に立つて、葉山へ来たのでしたが、尙一と月と経ない中にこんなことになつて、僕は今更ながら思慮の足らなかつたことを後悔します。全く僕が悪かつたです。潔白な貴嬢に御迷惑を掛けたいのは、僕の考への深くなかつたからなんです。」と司馬は拳で涙を抑へて、

「今日から暫らくも訪ねはしますまい、お目に掛りますまい。貴嬢もどうぞつとめて、そんなつまらぬ噂などをなくなるやうに、御用心なさつて下さい。僕は今日は失禮します。」と座を拂つて立上らうとした。露子は絶寄つて其手を握つて、凝然と對手の顔を見上げた。

相思怨……清き涙

三〇

相思怨……清き涙

三〇

「司馬さん、貴郎はさう仰有つても……。平常貴郎の仰有ることは、さうぢやなかつたんですわ。自分が世の中の濁りに浸まないやうにしてゐれば、それで安心することが出来る。凡ての社會を清くすることは、一人や二人の力で行かないから、自分だけを清く保てば、それで可いのだつて、貴郎は能くさう仰有つたては御座いせんか。さう仰有つて置きながら、噂が風説がつて、それは世の中の人云ふことなんですわ。噂や風説を絶つやうには、私もしたいと思ひますけれども、だからつて、貴君の仰有るやうに、もう巡はないの何しないのつて……。」

露子は言未了だが、咽んで涙が彼のやうに落ちたのである。

「ハムレットのやうな、潔白な高尚な理想を懷いてゐて、思まはしい人達の間生きてゐねばならないならば、誰にしても生きやうか死なうかと、自分で自分の體の處置に苦しむやうになるのは、當然だつて、貴郎は幾度か私に仰有つたわ。そしてハムレットに同情を寄せることの出来ない人ならば、腸の腐つた者に違ひないつて、貴郎はどんなに仰有つたてせう。私が讀んでゐる中に涙が出たのを、貴郎は何と仰有つて、え、何と仰有つて？」

司馬さん、貴郎はお忘れはなさいませぬね。」と露子は感情が激して來た。

「悪く世間に擦れたものには、ハムレットのやうな性格の者は、氣の毒な可哀想なと思はれるか知らないけれども、同じ心持になつて涙を流す迄、深い同情を寄せることはあるまい。親の仇敵を眼前に控へてゐながら、あんなにぐずぐず考へてばかりゐるのを、薄志弱行の所爲だと非難もするだらう。屹度私の理想に合つたから涙が出たのだつて。貴郎は何ういふ意味で仰有つたか知りませんが、さう云つても褒めなすつたてはありませんか。そしてハムレットにあんな叔父がなくなつて、悪い世間と交はらなくなつても可いやうな境遇だつたら、屹度濁つた世の中のことには目も眩れないで、自分一人を潔くして、理想通の生活を送つたらう、誰にしても一個の力量で世間を濟ふことは難しいから、身を潔くして自分だけでも満足をしたがよい、他人が何と云はうと、そんなことには頓着する必要はない。これが貴郎の主張だつて仰有つたわ。私は忘れません、何日迄も覚えてゐてよ。貴郎の仰有つたことが本當なら、噂だの風説だの何でもないことではありませんか。其時私は貴郎に誓つたことがあつてよ。ね、貴郎覚えてゐて？ 私も何處迄も何日迄も偽りのない誠意を以て、獨立の理想を立て、どんなことがあつても他人には動かされまい、枉げまいと誓つたわ。貴郎も私にさう誓ひなすつたぢやありませんか。そして二人の信仰は決

相思怨……清き涙
三三三

して、懺すまい、二人の愛はどんな迫害に逢つても永久に渝るまいつて、熱心に仰有つて、私の賛成をお求めなすつたぢやありませんか。貴郎はあれ程、お誓ひなすつたと、もうお忘れなすつたんですつわねえ。おだましなすつたわねえ。」

露子は母の來てゐられることへ今は忘れて、偏に司馬の言葉の便りないので、啣ち慨いたのである。

司馬も決してそれを忘れたのではない。堅く誓つたことを敢てするだけの勇氣が足りないのでもなかつた。けれども今の場合、露子の母がさう疑つてゐられるならば、少しは遠慮もせねば、却て他日の不利益ともならう、露子の爲に殊にさうした方がよからうと考へたので、それに多少は露子の母に疑はれたことが不快な感じを與へて、一時に遠ざからうと決心したのであつた。が、露子に道理を究めて云はれて見れば、誠に云ひ解く術もないのである。面目ない次第である。司馬は思惱みながら、黙して聴いてゐたのであるが、露子の意中を察しては、心にもない雄々しいこと云つてと、氣恥かしくも覺えたのである。

「露子さん、僕は決して忘れは致しません。誓つたことは今も誓ひます。貴嬢の心持も

相思怨……清き涙
三三三

能く分りました。併し將來の爲にも考へるだけは考へて、此上つまらない目を見ないやうには、互ひに注意をせねばなりませんよ。」と優しい手を握り締めて語つた。露子はそれでも自から慰め兼ねて、鼻をつまらしてゐたが、差俯向いた。

此時、

「お容様はただちいしてなされるのですか。入つても可いのですか。」と外方から呼んで、無遠慮に顔を現はしたのは、露子の母の静江であつた。

二人は慌て、左右に押開いたが色を變へた。母はじろりと白い眼で司馬を見下した。

十六の四

母はずつと通つたが、少しく二人を隔て、上座に坐つて、流眼に司馬の横顔を悪くさげにじろく見ながら、手を束ねて黙つてゐた。

司馬はどくくして、如何にも落着兼ねたものやう、僅に辭儀をしたのみで、體裁悪さうに、口に出しては挨拶もなし得ないのであつた。

露子は密かに母の氣色を窺つたが、權のある其眼に異様の光が充ちて、さりと結ばれた

相思怨……清き涙

三三

口許の犯し難い威嚴を備へて、近寄られさうにもないのである。此場を何うしたものか心を痛めて、千々に思ひを廻らしたが、恐れてか男子の司馬でさへ黙り込んでゐるのに、取着を失つて仕舞つて、力なく鬱いてゐた。

二人が申合はせてもしたかのやうに、むつゝりとして控へてゐるのを、母は何といふ高慢痴氣であらうと、殊更面白からず思つて見てゐたのであるが、到頭堪まり兼ねて、露子を顧みながら口を切つた。

「露さん、猶あなた方は用事が済まない所ぢやなかつたんですかえ。あの、阿母様が此處にゐて悪ければ、さう仰有れば御遠慮申すのですよ。何ですぬ、急にさう話がなくなつてお仕舞ぢや、可笑いぢやありませんか。」

母は冷やかな口調で云つて、故意と可笑さを忍ぶやうに、袖を口の前通りに當てた。露子は水を浴せられたやうに思つて、どきまぎした。

「いゝえ、あのお話つてもう何ですわ。阿母様がゐらつしやるから出來ないの何のつて云ふのぢや御座いませぬわ。」と辛うじて答へたが、若しや二人の談話を母は偷み聴きでもしてゐたのではなからうかと、不圖思ふと、露子は何となく安からぬ心地になつて、體内が寒

相思怨……清き涙

三三

くなるやうに覺えた。で、語り繼いでが言譯らしく、

「別にこれと云つた話があつたのぢや御座いませぬわ。司馬さんがお歸りにならうとするのを、引止めてゐたところなの。阿母様も入らつしつたのですから、もしも暇ならば遊んでゐらつしやるやうにして……。」と云つて、何とか司馬が此後を繕つて呉れさうなものと、振向いて睽をし、

「ね、司馬さん、貴郎本當に遊んでゐて下さるんだと可いわねえ。阿母様からも頼みなのよ。不可いこと？」と苦しさうに、かぶせて、せか／＼云つた。

司馬は露子の氣轉に舌を捲いたが、俄に言葉を見出さないで、當惑顔の頭を掻いた。そして差含んだやう、云ひそ／＼くれて仕舞つたのである。と、母は遮つて、

「これ露さん、あなたはそんな失禮なこと申上げて……そんなこと仰有るものぢやありません。當節學問をなさつた方が、みんな遊んでゐて可いと仰有るも體があるのですか、みんな遊んで暮して可い方ならば、それこそねえ、司馬さん、怠惰者ですわ。」と冷やかに司馬を眺めた。

司馬は深く當擦りを云はれたやうに感じて、言ひ知らぬ不快が胸を衝いたが、云返してや

相思怨……清き涙 三六

るだけの用意がなかつた。

「まア阿母様は何を仰有るの。」と露子は酷いことをと心の中にはらく／＼して、覺えず母を振向いてさう叫んだが、却つて意地悪く睨み返されて、恐れをなしたやう、小さい肩を窄めて差俯向いて仕舞つたのである。

母は委氣返つてゐる二人を見ると、氣味好ささうにしてゐたが、何を思つたか、少時すると、氣を碎いて力無げに溜息をした。顔の色が漸う冴えないのである。やがて、

「司馬さんも、露さんあなたも、能くも聽きなさいのですよ。若い中にはね、たとへば暇があつても、其暇を能く用ひて行くやうになさねばなりません。遊び暮すのはありませんよ。若い中から無精の癖がついて仕舞つては、働かうと思ふ時にも働けなくなるものですよ。暇だからつてくだらなく日を送る中には、いろ／＼とね、不善いことを思つたり、取返しのならぬ過誤をして仕舞ふのだから、能く氣をつけてね、暇な時間にも少しも善いことをするやう心掛けねばなりません。」と頓かに優しい物云ひになつたが、口を喋むと二人の様子如何にと見た。

母の調子の變つたのを、司馬は不思議さうに目を瞠つて、

相思怨……清き涙 三五

「暇な時間にも働けと仰有るのは、誠に明言です。僕等の時代には、稍ともすれば時間を空費しやうとする傾きがあつて不可ません。全く働く者に不善を求めても得られませんね。」と母の底意は知らね、其言葉には真理があると心に領いて、態と元氣好くさう云つた。同感の意を表したのである。

「やうですとも。」と母も領して、

「そんなことは誰も能く云ふことであるし、殊に又學問のある人や伶俐な方は、百も千も此以上のことを承知の筈だけれども、これが實際となりますとね、何うも理屈のやうに行かないものと見えますよ。惣つか學問があるとか伶俐だとか申しましても、そんな人に限つて世間の物笑ひとなることが多いのですもの。あなた方に向つて申すやうにお取りでは困りますけれども、それから考へれば、學問や何かはなくつても、家に置いて賤のよい人ならば、男子にしても女子にしても、滅多に間違ひはありません。親々の安心には生意氣なところがなくつて、どんなに其方が可いてせう。若い人が生意氣を云ふの程見苦しいものはありませんよ。露さん、あなたなども生意氣がたり、親を困らすやうなことのないやうに精々氣をまつけなさいよ。」

相思怨……清き涙

三六

あら、何時私が生意氣なこと云つたことがあつて。阿母様、あんまりなこと仰有るわねえ。」と露子は顔を赤くしながら、口を尖らした。

「い、え、阿母様はまだあなたを生意氣だとは云ひませんよ。これからのことを注意してゐるのぢやありませんか。又あなたは生意氣でない心算で云ひのことも、聴く人、聴きやうに依つては、生意氣も大生意氣に聞えることがあるものです。」

「そんな筈はありませんわ。ねえ、司馬さん、そんな筈はありませんねえ。」

司馬は母の氣を兼ねて、苦笑したばかりであつた。

「あなたのそれが生意氣ぢやありませんか、阿母様に手向つて何です。司馬さんが何と仰有つても、阿母様には生意氣は依然生意氣なんです。」と母は頭から口返答が出来ないやうに叱つて、

「あなたの我儘は悉皆その生意氣から來るのですよ。あなたは阿母様の云ふことなど、一つも正直に肯入れたことはありません。司馬さんや他の方の仰有ることはかすが、そんなに何したいのならば、困つたことのあつた時に、必ず泣きたい顔をなさつてはなりませんよ、ななぢらなちのですよ。」と屹と云ひ渡して、又考へたが司馬に對ひ、

「司馬さんにも私は申上げたいとありますが、流石は貴所は學問があらんさる方だけに露迄も能くまア理屈屋になすつて下さいました、母から厚くお禮を申して置きますよ。ですけどもね、女子は理屈ばかりでは、世間に立てるのぢや御座いません。露も何日迄も如那やつて、我儘にさして置くことは出来ませんから、身が片付くと共に、それ〴〵責任も加はつて、只今の我儘が二度と夢にも見る事の出来なくなりませす時節がまゐりますてせうが、其時にはどうぞお逃げなさいね、兎も角世に立つて行けますやうには、貴所からなすつて戴きたら御座いますよ。貴所の御感化で大層理屈も覺えましたやうですからそれも貴所のお力てなければ、母などが申しました分ては逆もね……。」

母は二人が愈それと、失望の度が増はると共に、段々腹立たしく思ふに任せて、我知らず言葉も尖々しくなつて来て、かまはず手酷い厭味を並べやうとした。

「僕は失禮します。」

相思怨……清き涙

荒々しく立出てた。

露子はわつと泣き伏して仕舞つたが、それと氣が着くと裾を引擦りながら、駈出して司馬の後を追ふたのである。玄關には早影も形もない。露子は氣狂ほしく跣足の儘に門を驅出して、辛而彼方に急ぎ足に去る其人の後姿を認むると、我を忘れて悲しい絞るやうな聲で、力限りに叫んだのである。

「司馬さん、司馬さん、鳥渡待つて、貴郎鳥渡待つて。」

けれども聞えてか聞えずにか、振返らうともせぬ。露子は垣に縋つて身を悶えて泣いたが氣が動亂した。

十六の五

露子の泣聲を聴きつけて、飛んで来たものがあつた。お金である。

「お嬢様、あなたまア何う遊ばしたので御座います。阿母様がお呼びになつてゐらつしやいますよ。さア、家にお入んなさいませよ。こんなとこに泣いてゐらつしやるのを人が見ますれば、何と申すか知れませんよ。さ、歸りませう。いへえ、阿母様は決してお嬢様がお

憎くて仰有つたことでは御座いせんから、御安心遊ばしたがりしう御座います。あれ、あんなに生呼びなすつてゐらつしやるぢや御座いせんか。まア、お履物も召さないて、何う遊ばしたので御座いますねえ。」と静かに顔を仰へた手を取つて覗込んだが、露子は咽び上げながら其處を動かうともしないのであつた。

「ね、ね、温順しくなさつてゐらつしやれば、あんなにも慈悲深い阿母様で御座いますもの、屹度その中には、お嬢様のお喜び遊ばすことが御座いますよ。こんな所を又阿母様が御覧遊ばせば、それこそあなた大變では御座いせんか。さ、参りませう、まアねえ、お足袋のまんまでお冷たいぢや御座いせんか。」とお金は宥めつ嫌しつ、泣き入る露子を辛而のことして連れ込んだが、少時休息をするやうにと露子の書齋に伴ふと、先刻の儘、膝をくづさず、殿として中央に座した母の静江は、苦々しい顔をして、悄然として入り来る露子を、険しい目に迎へ取つた。

これはと氣を痛めて、お金は覺えず進み兼ねて躊躇つたのである。露子は小さくなつて、片一方の隅に蹲まつた。

母はもう容赦はない。遠慮をするやうにとお金に目配をして、じりじりと露子の膝近く坐

相思怨……清き涙

三三

行寄つたのである。

「露さん、あなたは何うしてそんな愚かな真似をするのです。何が悲しくてそんなに見苦し涙を零すのですね。今日は阿母様はあなたにとつくり訊かねばならぬことがありますよ。」

露子は首僂垂れて、袂をいぢりながら、黙つてゐたが、何と思つたか、ついと立上つて、母の前を逃れやうと試みた。

「あなたは阿母様の話を聴かない中は、何處へも行くことはなりません。」と母はそれと見るより、怒りに任せて確乎と其手を捉へて、無圖と引据ゑた。露子は倒るゝやうに座つたが、駈り上げると身を頭はして、よゝと泣き沈んだのである。

母は激して俄に言葉も出なかつたが、これも涙合んで

「あなたはまア、何うしてそんな間違つた氣を起してくれましたかねえ。阿父様や阿母様のあることを何うして忘れました。月岡の家門を潰しても、あなたは何ともお思ひてはないのでせうか。何故さう情ない氣にはおなりだらう。大切な體だから、これからは病氣病氣と云ふのでも濟まないからと思つて、氣分がすつかりする迄とあなたが云ひの儘に、氣

相思怨……清き涙

三三

随にさしてあつたのは、あなたにこんな不心得があらう爲ではないのですよ。今日こんな悲しい目を見やうと思つてはなかつたんですよ。それなのにあなたは、なさる事もあらうにこんな人に爪弾きをされるやうな。」「と語は漸く迫つて来た。

「あなたは司馬さんをどんな人だと思ひか知らないけれども、一口に云つてもあなたを騙すやうな心得違ひをしてゐる人ではありませんか。何處に交際つて可いと思ふ所がありませんか。あなたは又親にも許されなくて、あんな危険な人と何故交際をなさるのです。交際したい人ならば、何故父母の前でなさらないのです。親の手前を病氣と欺いて、こんな仕放題な真似をなさるといふ法が何處にあるのですか。何處の嬢さんがそんな不善い真似をなさつたことがありますか。本當にあなたは思慮のないのにも程がありますよ。」「と鳥渡絶句して、直ぐ、

「露さん、阿母様の云ふこと、能くも聴きなさるのですよ。」「と自分も涙を拂つて、咽せ入る露子を凝然と睨めた。

「あなたはもう決つた良人といふものゝある體ですよ。結婚こそ未だしななければ、次郎さんはあなたの生涯を共になさる良人ですよ。この事は再三もうあなたには云つてある筈

相思怨 清き涙

三五

相思怨……清き涙

三五

ですから、萬一知らないとも云ひのことはありますまい。阿父様を始め、次郎さんの阿母様にしても、私にしても、一日も早くあなたの病氣が全癒るやうにと祈らんばかりにして待つてゐたといふのも、何も外の意味があつてはありません。早く婚禮を済ませて、兩家の繁昌を祝ふ爲、あなたや次郎さんの身が堅まるやうにつて、それを思つたからばかりなんです。あなたが司馬さんをお考へへのやうなことのあらうと知れてゐましたら、阿父様だつて何の約束をなさつて置くのですか。天が地にならうと親の吩咐を背くやうなことが、あなたに限つてあらうとは、阿母様はね、今日が日迄も思ひませんでしたもの。阿父様だつて、縣の小母様だつてさうですわ。いへ、昨日ね、次郎さんが入らして、種種と話の末にあなたに司馬さんといふ人のあるとを知らせましたけれども、阿母様はそれすら本當だとは思ふことが出来なかつたんですよ。ですもの、今日になつて、あなたの様子を篤と知つて、阿母様はどんなに驚いたか分りません。どんなに悲しかつたか知れませんが、阿母様はね、こんな口惜しく思ふことはありませんよ。」「と母は膝突寄せて語るのであつたが、纔かに懐へた涙を何時か一杯に湛へてゐた。

「阿母様が露さんの心を、本當の心を聞いて置きたいのは、この處なのです。あなた能

く聴くのですよ。え、能く聴かねばなりませんよ。あなたはね、次郎さんの方を何うなさ
らうとお思ひなの。」

母は露子が今何と返事をした所で、固より約束を取毀たうとは思つてはゐなかつたが、返
事次第では話の行方があると獨り思案して、氣を惹いて見るのであつた。

併し少し顔を上げて母を見れば、直ぐに伏目になつて、露子は遂にこれには答へやう
ともしなかつたのである。

「え、露さん、あなたは何うも思ひなの。次郎さんとの約束を何うなさうと云ふの。」と母
は露子の膝に手を掛けて云つた。

「何うつて。」と露子は小さく云つたが、何う考へても心にありの儘を口にし兼ねた。

「あなたがね、まさかあの約束に背いて、阿父様の御面目を潰すやうなことはなさるまいつ
て訊いてゐるのぢやありませんか。」

「だつて、私はかしが何しても……。そんなこと、あの今が今つて仰有つても、御返答は出
来ないんですわ。」と懼る／＼云ふのである。

「今が今あなたの耳に達したことはありませんよ。今迄にそれ位のことば、考へてお置きな
さい。」

相思怨……清き涙

三

相思怨……清き涙

三

の筈ぢやありませんか。何が今が今のことがあります。ね、何うする氣なの。云はなして
は分りませんよ。」と雅高に語つた。

「だつて、兄様とも御相談の上でなければ、御返答が出来ないんですもの。」

「次郎さんの心持は、よ／＼阿母様に分つてゐます。あなたの心さへ決つて了へば、次郎
さんの方はちゃんともう決つてゐるのですよ。」

「そんな筈はないわ、そんな筈はないんですわ。」と露子は打消した。

「い、え、あなたがそんなこと云ひの筈はないのですよ。又次郎さんが何うであらうと、
阿母様に對して、あなたはあなただけの覺悟をしなければならぬぢやありませんか。何故
さう分らないことを云ひます。」

「だつて私は兄様にお約束申して置いたことがあるんですもの。兄様の心持は私が直接に
聞かないことには、安心は出来ません。——兄様には何うしてもそんな心算はない筈な
んですわ。」と顔を赧めて抗議つたが、露子の強情さに呆れて、屹と睨み据ゑた母の只なら
ぬ氣色を見ると、吞まれて露子は蒼くなつた。

「露さん、あなたはもうこれ程阿母様が氣を揉んでゐますのに、少しも考へ直して見やうと

はなさらないのですねえ。それならば阿母様は此上何にも申しませう。あなたのよいやうになさる分のことです。……阿母様は他にもちらと聞込んだこともありませうが、あなたの爲に、阿母様の口からは云ふまいと決心してをりましたけれども……。若しもあなたは間違つたと後でも思ひのやうな約束を、誰にかなさつたことはないの。阿父様もね、露子にそんな不品行なことがあつたら、二度と月岡の門を潜らしてはならんと云つておいてから、今阿母様の言葉に背いても、其時になつてあなたが何と云ひても、阿母様は知りませんよ。」

露子は俯伏した儘、聲を忍んで又泣出して仕舞つた。

母は云ひ繼いで、

「その時にはね、阿母様に何と云ひても、知りませんから、さう思つてゐらつしやるのですよ。ね、あなたは何と云はれても辯解は出来ませう。これは何うしたのです。」と袂から引出して、露子の面前に突附けたのは、例の露子が司馬に寄せたといふ、縣が置去にした手紙である。

母はさう云つて自分も悲しむうに連絡した。

相思怨……清

三九

相思怨……清き涙

三九

ふつと目を止めると、確かにそれと見覚えのある手紙である。露子は少しも心に疚しく思ふことはなかつたが、何うして此手紙が母の手に入つたのであらうと、呆れて物も云へなかつたのである。慌て、引たくやうに、手に取上げたが、こんなことで自分は疑はれてかと、口惜くて泣き腫した眼に、怨みを含んで凝然と母を見返した。母は露子の驚きを必定不善ぬことのある爲だと心得て、一圖に淺間しいと思つては、悲しく情なく居堪まれないばかりであつた。

「ね、定めてあなたに記憶のないことでもありません。あなたは何と思つて、そんないやらしい手紙を書いたのです。能くまアこんな手紙があなたに書けたのですとねえ。」と居住ひを正して、

「阿母様はね、こんな大膽なことをなさるとの、あなたに出来やうとは、思ひはしませんかつたのですよ。あなたにね、こんな卑劣なさもしい心のあらうとは、夢にも知りませんでした。阿母様はあなたをこんなに生み附けた心算ではなかつたんですよ。それに、それに、能くまアあなたは父や母にこんな恥を掻かしました。一體これは何うした手紙でせう。」と鼻を填らした。

露子は争ふ勇氣もないもの、やうに、潜々と泣いてゐたが、夫程自分はさもしい者に見えてかと思へば、もう口惜しいと思ふばかりではなかつた。他人ならば兎も角もであるけれども、現在の母、自分が此上もなく尊んでゐる現在の血を分けた大事の母に、斯うも情ないこと云はれては、身を殺しても自分の潔白を立てねばならぬ。死んでも深い心を示さねばならぬ。怒つかの辯解をするだけに疑ひは増すばかりであると思つて、押黙つて云はれるだけのこと云はれやうと覺悟もして見たのであるが、又思直せば自分のことはそれで可いとしても、罪もない司馬に同じ汚名を被せては、自分として何うしても濟まないのである。これが爲に司馬の生涯を没するやうなことがあつてはならぬと、さう考へては強ひて今此處で母の心を解かうといふのではないが、黙つてゐて愈々それにして仕舞はれるのも遺憾である。て露子は母の言葉に逆らつてもと思はぬこともなかつたが、司馬の爲にと思ふ一念に驅られて、僅かに涙にぬれた面を上げて、決して此手紙が母の云ふ通りの怪しい物でない、何うして手に入つたかは知らぬけれども、自分が何處ぞで失つたのを人に拾はれたので、書いてあるとは偽りではないが、其爲にいやなことであつたのでないことを、前後になりながら一通り物語つた。そして、涙に曇つた聲に、

相思怨……清き涙

相思怨……清き涙

「ですもの、私は何と人に取沙汰をされてもかまひませんけれども、司馬さんは何有も御存じのことぢやないんですもの。私の爲に司馬さんが、どんな、どんな迷惑をなされるかも知れないと思つては、私はもう切なくつて、こんな濟まないと思ふことはありません。」と顔を押しへて云つた。

母は却つて露子の言葉に、むつとして怒りを増したのである。

「分りました、あなたの心持はそれで能く分りました。阿母様はどんなに悲しんでも、あなたがそれ程濟まない、とお思ひなら、もうね、阿母様は何有も云ひますまい。あなたはどんな概きを親が見ても、それかまはないと云ひてすね、司馬さんとやらが大切なてすね。親の子を思ふ位慈なことはありません。それならばもう何有も申しませぬよ。阿母様にも能く申しませう、どんなにお喜びでせうねえ。だけど、あなたは再び月岡の家に歸つてはなりませんよ。母の前に能く臆面もなくそんなことが云へたものです。これ程道理を分けて云つても、お分りでないのなら、あなたの勝手になさるのです。」と母は落着いたやうに云つたが、悲嘆に蔽はれて、其實碌々口も利かれないのである。涙ばかりが拭ふても、湧き立つやうに頬に流れた。露子は身も世もあらぬ思ひに又泣伏した。

母は鼻を去んだが、ツツと立上ると室を出た。ふし／＼として倒れるやうに思つて、茶の間に入ると、胸が痛んで、べたりと身を投出した儘、深い深い物思ひに耽つたのである。

十六の六

今更ながら思へば思ふ程、母は口惜しくてならぬ、悲しさに堪へないのである。「あなたのよいやうになさい」と氣強く露子に云ひ渡したものの、何を云つても、自分には只一人の可愛の娘である。歴平とした両親のありながら、こんな世間の物笑ひともなるべき不始末を仕出かしたとあつては、あの子の上ばかりではなく、月岡一家の此上もない恥辱である。親が子を思ふ半分でも露子に父母を思ふ情愛があるならば、口を酸くして自分がこれ程迄に云つて聞かせることの耳に徹らぬこともあるまいに、泣いても嘆いても及ばぬことゝは知りながらも、こればかりは泣かないではをられぬ、嘆かないではをられないのである。子でない、親でない、全然の他人と諦めやう、思切らうと考へないでもないけれども、何うしても自分にはさう潔く決心をすることは出来ないのである。この殆んど二十年來手鹽にかけて、養育をした大切の／＼、生命にも換へまいと思ふ可愛の者を、どうしてさう無

相思怨……清き涙

相思怨……清き涙

雑作に思切るとの出来やうか、諦められやうか、腹は立つても、心はちぎれるやうに思はれても、親と子ではないか、自分の腹を痛めた子ではないか。どんな辛い術ない思ひはしても、外方には指は屈られる道理でない、打棄てやうにも打棄て、置くことは出来ないのであると、母は熟々思案に思案を重ねては、怒りもし、泣きたくもなり、我と失望し去らうとしたが、顧みては怒るも泣くも、それが何になることでない、失望してはそれ迄ではないかと考へ直される。萎々として茶の間に氣を鬱いだが、好い思案とて浮かばず、さらば此上何うしやうといふ方法もつき兼ねるのであつた。刻又刻、時は次第に過ぎたけれども、同じこと繰返しく思ふばかりで、取止めたこともなかつた。

露子を今一度呼んで、理を分けて云つて聞かさうかとも思つて見た。併しあれ程云つて肯入れないのであれば、それも何の効力がないかも知れぬ。縣でもゐてくれたなら、或は却つて都合好いことのあるかも知れぬのであるけれども、縣から猶篤と露子の意志を聞かして見たならば、少しは司馬との關係も明瞭にならうと思ふけれども。否々、外の事とは違ふ、縣自身に關したことであれば、思ふやうには行かまい、露子も縣をいくら信じてゐると云つても、そんなこと語る筈はないのである。それにしても何ぞ縣に頼んで置いたこと

のあるやうにも、今の先露子は話してゐた。何であらう。どんなことがあつても素性も知らぬ司馬なぞに、大切の娘をくれてやるとは出来ませねば、そんな無法なことの當人同志の意志に任せて、親として許さるべきでないから、縣が此場合ゐてくれても、決して後々のことに差支ふべき筈はない。縣に逢つてと云ふ露子の望みを慥へて、二人で相談をさしたらどんなものだらう。兎も角縣がゐてくれたならと、母は更に其事を一筋に思つたが、今此葉山でこれが何うすることの出来やうかと、竟にはぐつたりとして、青い溜息を吐いて、考へ飽倦んだのであつた。

午刻はもう過ぎてゐる。勝手元ではお金が盡き取急ぐ膳立の音が忙しうにしてゐる。母は時刻が何時になつたか思つても見ぬ。ひもじいとも感じないのである。

又考へ初めた。露子の父にはまさかそんなこともなからうと、九分九厘迄自分で保證をして來ながら、何と返事をしたものであらうか。ありの儘を云つたなら、あの一徹な御氣質で黙つて引込んでゐられやうか。二度と月岡の門を踏ませぬと云はれたことが、木當のとなりはしないだらうか。母にはこれも少からぬ氣掛りである。母は眉をひそめて、とつあいつ胸を痛めたが、露子は何をしてゐるだらう、獨り考へても何の益に立つのではな

相思怨……泣き涙

二六四

相思怨……入る日の名残

二六五

い、呼寄せて結果は何れにしても、今一應改めて話してきかざうと思附いて立上つた時、何と云ふ幸ひか、母には偶然にも縣が訪ねて來た。走り出て、夢かとはかり喜んで、迎へ入れたが、相對しては互ひに言葉もなく、縣が悄氣切つてゐるのに、母は猶更氣が沈んだ。

入る日の名残

十七の一

「次郎さん、貴所能くまア入らして下さいましたとねえ。私も全く當惑して仕舞つてゐたところなんですよ。こんな時に貴所でも來て下さるんだと、どんなに力強いかも知れないと、つくづく考へてゐた處なんですもの。……次郎さん、私はもう貴所には本當に面目が御座いません。」と昨日の様子とは打つて替つて、母は下にも置かね待遇振である。悲愁の思ひを胸に裹みながら無様にそれとも云ひ兼ねて、努めて言葉を裝ふて語つた。

「いや、どんなことだか存じませぬけれども、僕に對して、小母様が面目の不面目のと仰有ることがあるのですか。」と縣は露子の母の心をはかり兼ねて、笑ひながら打消したのである。

て、縣は今朝早く母の殿かなる吩咐を悻し兼ねて、月岡家を訪ねたのであるが、露子の父から、初めて昨夜母の静江が葉山に向向いたことを聞知つて、一方ならず驚いたのである。實は床に就いてからも、露子の事を考へて、母の云はれること、自分の思惑、それからそれと理を辿つて、何う處置をしたものであらうと苦しみつ惱んで、殆ど夜を徹して黎明に及んだのであつた。母の身になれば自分を我儘なと云はれるのも無理ではない、永い間露子を我娘のやうにされたのも、それだけの考へがあつたからである。けれども自分は母の氣安めの爲ばかりに、露子や司馬の不信を買ふの勇氣はない、そんなとは出来ないのである。一旦斯うと云つたことを假令口實とする理由があつたからとて、容易く踏むことの出來やうか、背かれやうか。人は必ず自分の處置を正當と思つてはくれまい。露子を強ひて自分が得やうと思つたからだとなんぞと断じ去るだらう。又實際に於て果して自分は母に仕へやうとの心からばかりに、こんな懊惱苦悶の掬となつてゐるのであらうか。果して露子を残り惜しく思つてはゐないだらうか。それは怪しい、自ら大いに怪しいのである。縣はこれ迄に再三同じ考へを重ねて來たが、自分の露子に對する思ひを、努めて母の心に背くまいとの考へから出たのだと、知らず／＼さう思做してゐた。自分一個の卑しい利慾から割出し

相思怨……入る日の名残

たこと、は、何うしても考へたくなかつたのである。そして強ひて心中に不安を懷くまいとした。併し翻つて考へれば、何となく面白からぬ感じもする、疚しい心地にもなるのであつた。縣は終宵一筋に此思ひを辿つて、何れにか心の満足を見出さうと苦しんだのであるが、道理は遂に動かすことが出来なかつた。次第に心淋しく氣細く、悲しく泣きたくなつて、果は枕を抱へて、有明の瞬く燈光の影薄さが中に、悄然として寝巻姿の、身に泌む夜寒に慄へながら、暗涙に咽んだのである。無理になさうと思つて出来ぬことではないけれども、縣は逆も曇りなき其良心を欺くことは出来なかつたのである。自分がどんなに苦しんでも、既に露子の心が自分の上にならぬからには、それを自分が何うするとの出来やうかと考へたので、勇ましく此惱ましの思ひを断つて、何處迄も司馬露子の身を庇護ふやうにせねばならぬと、悲嘆をおさへて辛うじて心を定めたのである。て朝になつて母に急立てられて、月岡を訪ねた時にも、最早心を動かさなかつた。もとより母の求むる通りの詫びを入れやうとは思つても見なかつた。自分の失儀は謝せよとならば謝するけれども、あの時の言葉を取消すことは、何うしても出来さうになかつたのである。されば露子の父から母の葉山行と聞いて驚いた縣は、露子の身に一變動の起りはせぬかと、もうそれを氣遣つ

相思怨……入る日の名残

たので、父には何處迄も露子を辯護して、昨日云足らなかつたと思ふ所を改めて語つて、其足て葉山に露子の母を追ふたのであつた。父の話振にも母に逢つて露子の當惑が思遣らるゝばかりであつたから。

けれども、松の並木隠れに別荘の棟を望んだ時に、我としもなく縣の胸は更に怪しく搔亂されたのである。揃はぬ途の勾配に搖るゝ車の上に、眼を閉ぢて胸に手を組みながら、果敢なき其幻の戀を思うては、流石に數行の涙なきを得ぬ。自分の外に打出して語る唯一人の友だにもなく、小暗さ心の間に我と葬去つて、愁ひを歡びと装ふ苦惱は、何にたへるものがあらう。荒れたる春野に彩る何の花もなき傷ましさに似て、永へに慰籍なき我が心の領の、借てもすすびにすすびけるよと、内に顧みては、驚かるゝよりは先づ腸を斷つ心地である。縣は衿を締め身を頰はして、拙なくまつはる命運の、飽迄理性に従はねばならぬ其身の現在に、如何ともなすなきを考へ及んで、我と我が肩を抱いて泣いた。ほろと轆棒の下さるゝのに愕然として現に返つたが、悲哀を襲み兼ねて勝れぬ氣色をして門に下立つたのである。

露子の此頃は何うであらう、露子の母はどんな様子かと、猶懐しい思ひの中に恐怖を含ん

相思怨……入る日の名残

三六

相思怨……入る日の名残

三六

て、玄關先に進んだのであるが、露子の母の顔を見ると、もう氣を張つて強ひて元氣能くなつた。どんな様子かとそのみに注意したのである。

で、思掛なく訪ねられて喜ぶ母の氣色には、露子が苛まれたと思ふ所はないけれども、淋しい笑まひの中にも、まじ／＼と陰氣な影が匿れてゐるやうに思はれる。さう思つて見るからかもしれぬが、何となく氣遣はしくて、縣は自分にも愁ひはありながら、押襲んで快活な調子に、

「僕は小母様のち後を追驅けて來たのですよ。今朝小父様に承はつたものですから。一つは露さんにもお目に掛りたいと思ひまして……。」と紙篋を取出しながら、それとなく話を誘つた。

「貴所がさう仰有つて下さると猶更のこと、私はもう……。」と母は見る／＼顔の色が沈んで來るのである。

母は切なげに俯向いて、

「貴所に何と仰有られても、私は一言のお答も出來ません。本當はもう、貴所で御座いませんでしたら、お目に掛れる次第のもでは御座いませんですよ。こんなことを早く知つて

のましたのだと、どんなことでも貴所のお耳に入る迄も、如那やつて置くことではありませんかつたけれども、次郎さん、私はね、私は昨夜が昨夜迄、こんな不心得をしてるませうとは信じていることが出来ませんでしたのですよ。貴所に注意して戴いた手紙を見ましても、それとは何うしても考へることが出来ないでした。親と云ふものは、何うしてこんなに馬鹿なものでせうねえ。これもね、詮じ詰めますれば、甘やかしが過ぎた親の罪には相違ありませんけれども、私の嫉が足らなかつたと自分を責めるより外はないのですけれども、次郎さん、私は立派に教育もあんなさる男子でありながら、こんなに人の娘に道ならぬことを教へて下さつた司馬さんと仰有る方も、可恨しくないことはありません。口惜くも思はずにはゐられませんよ。好いお心掛のお方だと感心致しました。涙が零れるのですよ。」と顔へ聲の、涙含んだ眼に縣を見守つたのであるが、僅に騒ぐ心を落着けて、しみく〜と物語るのであつた。不意に悲しい話を仕向けられて、はつとばかり、縣は慌てたのである。

「東京の家を出ます時には、萬一やこんな心得違ひがあらうとは考へることが出来ませんで、父にも露のことは私が引受けて、不面目のないやうに致しますからつて、請合つてま

相思怨……入る日の名残

二二〇

相思怨……入る日の名残

二二一

ゐつたので御座いますが、只今となりましてはね、何と申してよろしいやら。よしんばこれが正當の順序を経て何しましたものでも、喜ばしいと思へるものでもありませんのに、況してこんな親に許可も乞はないで、思はしい約束など致しましたからつて、何うしてそれが肯入れられませうか。素性も身分も知らない人に、婚姻が許されますものでせうか。思ひ思つた間だと云へば、可哀想でもありませんけれども、それは場合に依つてのことと御座いますもの。親に恥を掻かすやうなことをして、それで貴所何うして黙つてをられるものでせう。私はこんなに情ないと思ふことは御座いませぬよ。昨日は貴所をお怨み申すやうなことを申して置きながら、斯うなつて又貴所に愚痴をお話します私の心はね、次郎さん、どんなで御座いませう。」

「小母様のやうに一圖にござう思込んでお仕舞なごつても、露さんにも御事情がおあんなさるでせう。小母様には露さんばかりがお悪いやうだけれども、考へれば可哀想ぢやありませんか。僕が昨日お話したのは、決して露さんを憎んで申したのぢや御座いませぬよ。僕は、僕は露さんの望み通りにして上げたいと思つたばかりに、あんなこと申上げたのでしたけれども……。だから、小母様のやうに仰有つても、何ぢやありませんか。」と縣は慰

め兼ねて苦しうに云つたが、稍開き直つて語り繼いだ。

「僕と露さんとは兄妹も同様ですもの、僕が露さんを氣遣ふのは當然なんです。たとへ露さんは僕を快く思つて下さらぬとしても、僕はそれでも憎まうとは考へません。小母様は親に耻を搔かしたつて仰有るけれども、それこそ僕が保證しますよ。露さんの立派な精神を以て、何うして思慮のないことをなさるものですか。司馬君も決して小母様のお考へなさるやうな下劣な男子ぢやありません。第一そんな賤しい男子なら、露さんの氣に入る筈がないんですもの。僕だからつて、友人として決して交際はしないんです……。」

母はいやな眼附をした。

「次郎さん、貴所はさう仰有るけれども、私から考へれば、貴所はもう露を遠ざければそれで済む所から、そんなこと仰有るんぢやないかと疑へるんですよ。貴所はそれで済むとお思ひなさるかも知りませんけれども、私は母であれば、此先どんなことになりまして逃れることは出来ませんですよ。親と子といふもの、間は、切らうとて切れるものではないりません。」

「そ、そんな利己心から僕は申上げてるんぢや御座いませぬ。小母様は何故か疑ひなさるん

相思怨……入る日の名残

三五

相思怨……入る日の名残

三五

てせう。」と露は今もそんなに露子の母が自分の心中を疑つてゐるか、呆れ果てたやうに口早に答へたのである。

「貴所は露をどうせよと仰有るんですか。」と母は露の眞意を聞かうとした。

露は熱心に説いた。

「小母様が僕の心事を疑つてゐて下さるやうでは、こんなこと申上げてもお取入のあらうとは思ひませぬけれども、僕は平生露さんに力を添へやうと約束したこともありすから、信する所を申上げるのですよ。僕は小母様が能く露さんや司馬君の事情をお調べになつて、不品行なことがあるかないかも御判断なすつた上で、何うとも御處置をなさるやうにも願ひしたいのです。司馬君だつて、決して當世の紳士として缺點のある人物ではないんですよ、僕はさう信じてゐます。」

「それでは貴所は露を司馬さんに娶はせよと仰有るんで御座いますか。え、二人の望みを愜へてやれと仰有るんですか。」と母は心地好からぬ顔をして、問詰めるやうに云つたのである。

「結論はまアさうですが、それも僕は小母様、全く思慮もなく云つてゐるではありません。

司馬君は決して露さんの良人として、可恥しい人物ではないんです。友人間にも最も推されてる者は司馬君なんですもの、卑しい道ならぬことでもする下劣な男のやうに小母様がお取りになるのは、それはあなたのお考へ違ひなんですよ。司馬君を能く御存じないから出たことだらうと思ひますよ。其處は露さんの目の方が高いんです。露さんが司馬君を何とか思つてゐらつしやるんなら、決して見損ひぢやないんです。夫婦になさつても恥かしいことはありません。」と露はのべつに云進んだが、何處やらに力無げなる調子。平然として控へてゐたが、心中で云知らぬ淋しい思ひをした。

「ま、貴所は亂暴な議論をなさるではありませんか。いゝえ、私から考へれば、さうばかりは参りませんですよ。私は見損なつてゐるか知れませんが、そんなにいいそれと、こんな大切なことは決めて仕舞ふことは出来ません。考へても分ることは御座いませぬか。司馬さんはどんな立派な家にも生れなかつたのかは存じませんが、凡そ世間の縁組には程といふことが御座いますよ。釣合と申すことがありますよ。當の人が立派だからつて、さうばかりはね、行かないんです。夫婦にしますには、雙方の親達に折合といふことも必要ぢやありませんか。家の面目といふこともあるんですもの、何うしてさう考へ

相思怨……入る日の名残

三五

のないことが致されませう。」

露は窮して座にも堪へないやうに黙込んで仕舞つた。もう云進む勇氣も推け去つたやうに感じた。悄然として、折角の苦惱に打勝つた其意氣組も、滅入り果てたかと疑はれたのである。で、少時は知覺を失つた者のやうに徒空然としてゐたが、露子の母に氣味悪く流眄を送られて、鉢裁悪く、僅かに氣を引立て、苦しげに語り繼いだ。

「てすけれども小母様、僕は當人同志さへ承知のことならば。——當人同志のそれ程深い希望ならば、可成は其希望を愜へさしてやりたいと思ひますよ。此事が直ちに一生の幸不幸に關することなんですもの。僕は結婚には、餘り深く親權を及ぼさないうて、當人等の幸福を基礎として是非を判断したいと思ひます。それが亦正當だらうと信じてゐますよ。」

母は胸悪く感じたが、折角話相手にもと喜んだ露に、一も二もなく反對を云はれて、情ないやうにも思つたのである。全くのこと思々しくもあつた。

て、言葉も自然と荒く、

「それはもう、私風情の女には、結婚がどんなものか、それア難しいことは分りませんですよ。けれどもね、親の同意がないものならば、世間では承知をしてくれませぬ。貴所の仰

相思怨……入る日の名残

三五

有る議論は大層立派だけれども、それを阿母様はよいことだと仰有るんですか。お訊さなすつていらつしやつたんですか。え、そんな筈はまさか御座いませんでせうよ。私だつてもね、それで済むやうなものと、何も好んでこんな貴所がたに嫌はれること申すのぢや御座いませぬ。我儘がよいのなら我儘にさして置きますよ。貴所はどんなに無責任なこと仰有つても、それで済みもなさうけれども、母の身になりますとね、氣遣はずにはゐられません。」と云ひ畢つて我知らずほろりとした。縣は全く言葉に詰まつた。「ですけれども、露さんも可哀想ぢやありませんか。全く可哀想ぢやありませんか。」と殆ど口の中で繰返した。

「い、え、何が可哀想なことがあります。打捨つて置く程、身の先が思遣られて私は可哀想に思はれますの。」と母は氣を苛つて、

「貴所の仰有るやうなこと、露が聴いてゐましたら、又此上にどんな我儘が募るか知れたものでは御座いませぬ。もう、後生で御座いますから、そんなこと仰有つては下さいますな。」と差合ひ涙を拭ひながら云繼いたが、露子の蔭にははらくとして、懐しい縣の聲を何時かさくつけて、耳を澄まして露子が立聽をしてゐたのである。

相思怨……入る日の名残

三六

相思怨……入る日の名残

三七

十七の二

母も縣もそれとは氣も着かぬ。妙に談話が切れて仕舞つて、良少時は黙坐して、顔を見合してゐた。

縣は何を思起してか、つまされたやうに悲みの襲ふを覺えた。心も何となく搔亂されてゐる。氣が鈍るやうにもあつた。やがて、思ひ付いたらしく、

「そして今日は露さんは何うなされたのです。お外出ですか。在宅ぢやないんですか。……僕もゆつくりと目に掛つて、小母様も御安心になるやう、又露さんにも満足が出来るやう考へて見るとしたいのですが……。」と云辛さうに語つた。

「い、え、家に居りますでせう。」と云ひながら母は直様手を叩いて露子を呼入れた、見ると、「しばらく。」と縣は親しげに挨拶をしたが、露子は膝近く坐ると、黙つて頭髪を下けたばかりであつた。

母も黙つて露子を不機嫌な顔の色をして見据ゑたのであるが、面目なげに俯向いてゐる様子に、我と悲しくもなつて来て眼を濕ました。そして故意とらしく汲子を取つて、茶を入

れ替にと立つたのである。縣は却て都合好しと喜んで、露子に擦寄つて覗き込みながら、「露さん！」と小聲に力強く云つた。露子は僅に顔を上げたが、眼にはもう振零れるばかり一杯の涙を湛へてゐた。

「兄様！ 私何うしませうねえ。」と縣の膝に犇とばかりに縋つて、悲しうに身を顛はした。萬感胸に迫つて、露子は何を何う云つて可いものやら、殆ど分らないのである。縣も壓へつけられるやうに思つた。

「大丈夫です。何事も仰有るには及びません。僕にも種々の事情があつて、露さんにも御無沙汰をしてゐましたが、僕は決して露さんのこと忘れてゐたんぢやありませんよ。もう大丈夫です、どんな難題が生れて来ても、僕が露さんに替つたことは、必ず果してお目に掛けますから、決して心配なさらなくつても可いんです。露さんも辛いだらうけれども、僕も……僕だつて辛いことはないことはありませんもの。もうね、何も仰有るには及びません、仰有るんぢやありません。」とつくづくと語つたのである。で、露子は同情の溢るゝ如き縣の言葉を聞いて、覺えず咽び上げたが、此際云はうとて逆も潮の寄するが如く思つた、打騒ぐ其胸を開くことは出来なかつた。

相思怨……入る日の名残

相思怨……入る日の名残

「阿母様はね、何を云つても肯入れては下さらないんですし、口惜いことばかし仰有つて、私が、私が道ならぬことでもしてゐるやうに疑つてお仕舞ひなさるんですの。兄様、私にそんなことが何うして……。」と訴へるに人なき無念さと思つては、悲しく切なく張裂けるばかりの小さき裏心を、僅かに兄と頼む天にも地にも一人の縣に語らうとしたのであるが、込上げる悲痛の情に遮られて、舌が動かかなかつた。縣は差俯向いた。

「私はね、何もそんなこと云はれる記憶は少しも御座いません。口惜しいことを云はれる記憶はないんですわ。阿母様も餘まりなこと仰有るんですもの。兄様、私はね、いつ迄もこんなこと云はれる位ならば一層死んで仕舞ひたいんですの。死んでもかまはないと思つてよ。酷いつて本當にもう餘まりぢやありませんか、餘まりなんですもの、そんな氣もして來るのですよ。」

「露さんの精神は僕が能く知つてゐます。貴嬢は決して阿母様を怨みがましく思ふのではありませんよ。阿母様はね、露さんのことばかし氣遣つてゐらつしやるんですもの。」と縣は脊りに母を氣にしながら、露子を慰めるのであつた。

「いゝえ、怨みません。私が足らはないから、御心配をかけるのだと思つては、私はすまな

いのです。ですけれども私の云ふことは些少も聴かないで、さうと獨りぎめをなざるぢやありませんか。私はどうして可いんだが分りませぬわ。」

「何も彼も僕に任して下さい。僕を信じて任して下さい。露さんはもう何有も仰有るな。」と縣は抱き起して、取亂した露子の姿を、凝然と哀れ深く見入つたのである。口を結んで重ねて言はなかつたが、露子も縣が任せよとの一言に限りなく喜んで、力と感じたのである。て、縣は僕に任してと頼母しいことを語つたが、其實自からは固より何等の成算があるのではなかつた。氣が昏亂してゐるかのやうで、唯露子の心を安めたいとばかりにさう云つたのであるが、それさへも殆ど無意識に口にしたかと思はれる。縣が込みに込んだ胸を裂いて見せたならば、露子とて無邪氣にさう一圖に嬉しく考へることは出来なかつたであらうけれども、廣い世間に一人の同情者として懐しむ優しい心には、其一言一句も百日の説法よりも重しと聽かれるのであつた。露子は愁ひ深い面を上げて、涙に輝く眼に縣を仰いだのであるが、縣は稍肩をそゝつて小首を傾けた儘、物を案じて惱むかのやう。ほつと青い溜息吐いて、凝然と露子を睥めたのである。

弱い日の光が開放された窓から、壁に顔へるやうな蔭を投げて、軒には枯葉のはらりと

相思怨……入る日の名残

三〇

相思怨……入る日の名残

三〇

散るのである。静かな庭の木立を騒がして、肌寒い風の早や秋の日の暮を急いで、忙しく障子に音訪れた。雲多き空に、孤雁の聲さびしく、影は斜に海の彼方に消えた。やゝあつて、縣は眼を霜にすがれた庭に移したが、つくづくと身に浸みたるやうな口調で語り出した。

「露さん、だけでも人の運命といふもの位、不思議なものはありませんねえ。僕にしても、あなたにしても、自分の行く先が何うと分つてゐるんでしたら、此節のやうな苦しいことにも、豫め避けるといふことが出来たでせうと思ひますけれども、人といふものはこんな一先が見えないものですかねえ。世間の事は何でもよい工合のことには行かないものと諦めれば、それ迄のやうですけれども、……事柄次第ではさうも諦められるか知れませんが、僕は、露さんのことについては、小父様や小母様がどんなに僕を悪くお取りになつてゐらつしやるか知れないと思つては、胸が一杯になつて来て、僕の心中を割つて申上げることの出来なだけ、どんなに口惜いか知れません。諦めると云つて觀念をすることは出来ません。」と茫然として、

「僕の心中の苦悶は、他の事ならば知らぬこと、露さんにだつてこればかりは打開けて申す

ことは出来ません。打開けたくとも出来ません。もうどんなことがあつても、どんな苦しい思ひをしても、僕が露さんに誓つただけのことはしますけれども、……露さん、それはね、僕が凡ての希望、凡ての目的を賭してやることなんです。僕はあなたに誓つたことを行つて了へば、もう世の中には用のない体となるんです……。」

露子は此沈痛と哀切を極めて語る其意味の何であるかは、能くも了解しないのであつたが、そぞろ悲みの聴くに堪へないで、進出て熱心に、

「兄様、兄様、どうしてそんなこと、あなた、どうしてそんなこと仰有るんでせうねえ。まだこれからが世の中に大切のお体では御座いせんか。それにあなたは用のない体になるの何のつて、私が御心配をお掛け申したばかりに、あなたが世の中をお捨て遊ばしたら、私は、私は何うすればよう御座いますでせう。私は兄様ばかりにお縋り申してをりますのに、兄様にそんなこと仰有られると、悲しくつて……。ね、兄様それはどんなことなの？兄様が苦心に苦しいと仰有るのは、どんなことですか、私が承つてよくないことつて、どんなことですかのねえ。私はそれを兄様ばかりに苦まして置くことは出来ません。ですも

相思怨……入る日の名残

三〇

の、私にも仰有つて下さいまし。私は何うしても気が済みません。」

相思怨……入る日の名残

三〇

「いえ、露さん、それだけは訊いて下さるな。僕はこんな怒つかのこと言出す心算ではなかつたんですけれども……。露さん、唯ね、僕があなたにお願ひして置くのは、こんな小父様や、小母様の御機嫌のお悪いのを、無理にとお願ひしてあなたの望みを達して上げる心算なので、將來先にどんな困難が出て来やうとも、能くね、其事にだけは忍んで、御両親に此上のお氣苦勞を掛けないやうに御覺悟をなさることなんです。僕は此事は司馬君にも能く云つて置かうと思ひますよ。僕は唯あなた方二人が、何日迄も今日のお心を以て、楽しく暮しになれば、満足します。陰ながら喜んでをりますよ。露さんがそれだけの決心をなされば、必ず誓つただけのことはしてお目に掛けますから……。」

「兄様。」とばかり、露子は餘りの勿体なさに、繼ぐさへ言葉さへなく、感激の涙の湧くが如きを覺えて、紅絹のこぼる、袂に顔を蔽うて潜々と泣いた。

露子は縦横の感慨に胸を壓して、堰さ来る涙を辛くも堪へたが、何時か眼底の濕ふを禁め得なかつた。吁、斯くて自分の胸に天火の燭を點じた此熱烈なる戀は、枉ぐへからざる一片の意氣あるが爲に、竟に深く其下に藏して、空しく盡滅し去らねばならぬ。拙なき命運を

抱いて、滿目の荒涼たる人の世を行く果敢なる哀れさは抑も如何ばかりであらうぞ。誠に思へば今の自分こそ、彼の慘として天日昏く、凶鴉梢に低鳴して、草蓬々たる我が行手には、雲低く迷うて林野沼澤の地形をだにも究むることの出来ぬ行路の人ではなからうか。それももだし難き約束である。縣は今に迫りて何をか求め、何をか望むことのあらうぞと、眼を閉ぢてわづかに觀念した。

露子が聲を忍んで泣く聲、縣が涕を去む音、風は庭面に吹荒れて、夕日は其名残を僅かに雲に止めた。斯くして今日の一日ははや暮るゝのである。

途端小刻の足音がする。

二人はひとしく電氣に感したやうに、直に母のそれと覺つて、目を見交はした。

「露さん！」

「兄様！」

と目と目で云はして手を取合つたが、聲音の近づくまゝに、飛退いて席を隔て、二人向ひ合つてしゃんとした。

思相怨……入る日の名残

三〇

けれども露子は流石に氣弱くて、入り来る母の顔を仰ぐと恐るゝものゝやうに、再び首を垂れた。縣もぐつたりとしてゐたが、此時はもう觀念の臍を固めて、思想も確かであつた。さらば縣は能く露子を喜ばすだけに、母を説き伏せ得るであらうか。恐らくは縣自身未だ必成の計算はないのである！

ともし火

十八

縣は露子司馬の爲に、遂には顔を赧めて熱心に説いた。それは結婚は全然自由でなければならぬこと、二人の關係は潔白であること、司馬は月岡家の婿として耻づべきでないこと、自分は何處迄も露子の爲にこの一事を主張せねばならぬといふことなどを繰返すのであつたが、母の辭は如何考へても、親が干渉をする位でなければ、行末愛度の結婚が出来る筈ではない、若い同志が一時の熱に浮されてすることには、確なことがないと、堅く取つて動かなかつた。縣はそれでも言葉を盡して、其根據のない説であることを理を分けて話したのであるが、結果は恐ろしい母の不機嫌を買つた

How Speed am I
broken English

三才
三才

に過ぎぬ。て到頭母と縣は衝突して仕舞つたのである。母は二度と縣のいふことを聴かぬと云出し、縣も又小母様には此上は申上げまい。小父様にも願ひをすると云つて座を拂つて立上つた。不運は何も彼も出来損つて仕舞つたのである。露子は正體もなく泣出し、縣も母も各自の思ひに涙含んだ。

最早長く止まる必要はないと、露子には父の男爵は必ず道理を聞分けて下さるであらうから、今暫く失望しないで吉報を待つやうにと慰めて、縣は其日の中に東京へ引歸したのである。露子は縋つて泣いたが、此上自分のことは關つて下さるな、自分は何うなつてもよいのであるから、兄様達が不信用になられるやうなとてはならぬと云つて、殊勝にも今は却つて縣の身の上を氣遣ふのであつた。母はこれといふのも偏に露子の不心得からと怒つて、叱り怨み愚痴を云つて、自分自身にも泣いて泣いたが、東京へ歸つて縣がどんなこと父に説かうも知れぬとそれが氣になると、矢も楯もたまらなくなつて、次の朝早く匆忙にして出立した。露子を殘し置くことが氣掛りてならぬけれども、そんなこと考へてゐられないから、此方では金を呼んで、嚴に監督をするやうにと附付け、心残りはしながら一人て出立したのである。露子には再び司馬に逢つてはならぬ、途中で逢つて物も云つては

相思怨……とし火

三〇

ならぬと、呼寄せて繰返し云置いた。二人の交際はこれで全く不自由なるものとなつた。露子を思ふ真情の切なだけ、お金は益露子の意を通させないのである。事態が斯うなつて、今唯一度逢つてと惚れ惚むのであつたが、それさへも利益にならないこと、云つて肯入れて呉れなかつたのである。露子は全く失望し去つた。身も世もあらぬやうに思つた。

相思怨……とし火

三〇

最早斯うなつては迎もく難しいとと諦めやうとは努めてゐながらも、何となく縣の音便の待たれぬこともなかつた。けれども數日を経つて未だ何とも云つて寄越されぬ。十日にもなつて端書一本來ないのであつた。諦めやうと心ならずも努めつゝ、それでもまだ一縷の望みの繫がれてゐるやうに思つた露子は、茲に殆んど絶望の境に落ちたやうに感じたのである。身を悶えて狂せんばかりにもあつた。

露子は永久に失意の人となりは果てぬであらうか。冬に隣つて世間は漸く目に入る物凡てが、何となく裏淋しく思はれる。庭にはらくと落葉の、半宵の冷たさ夢を騒がしては、もう再び寢着かれないことが多かつた。嚴霜肅殺の

氣を帯んで、盡も猶心が浮立たないのである。露子は日の影薄き書齋に悄然として、昨日も今日も同じ悲しい思ひを辿つて、深く垂籠めてのみ暮したのである。

海の方から押寄する濃々たる大霧に遮られて、野も島も里も木立も、ひとしなみに薄暮を張られたやうにぼんやりとして、夜目にはありとあらゆる此等の物象が、恰も夢幻の境にあるものゝやうにも思做されるのであつた。月の色さへ望まれないのである。露子は此頃の毎夜、漲る如く濃き霧の冷濕の氣を漂はして、且には箱と結ぶが中に、庭に面した南方の雨戸を繰つて、高く手に持った燈火をかゝけて、二更三更に及んでも猶立盡すのが例であつた。顔に無量の愁ひを含んで、眼に輝くものがあつた。遠く遠く霧を隔て、彼方松並木の外方に、一點星のやうに明滅する光を熱心に覗めて、其光の心細く瞬く毎に、手を雨戸に縋つて、足を爪立て、伸上り伸上り、我を忘れて狂するものゝやうに身を悶え、偲は全く光を見失つては、其處に投伏して泣沈むのであつたが……。

遠くの光、其光は戀しい人の窓から漏るゝものである。顔も見えず聲も聴かないけれども、露子には膝を交へ手を握合つて物語るやうの懐しい思ひがするのであつた。互ひに燈火を

相思怨……ともし火

三六

相思怨……ともし火

三六

かゝけてと、何日云合はしたといふでもないが、二人は燃ゆるやうな情思と、身を熬るばかりの戀じさにと、斯くし隔てられては、愈堪へ兼ねて、僅かに兩點の燈火に託して、心を盡し合つてゐるのである。燈火を宵に初めて望む時には、断えやうとした望みが再び繋がれ、弛んだ氣が張り、胸は踊つて喜びが湧くばかりであるが、更けて光の消ゆる時には、又更に悲しく情なく、我が身も何日か闇に葬られ去るのではないかと、氣細く思はれる。床に入つても、涙に小枕の濕るばかりであつた。司馬も恐らく同じ思ひを重ねてゐるだらう。

時雨には猶早いのである。淋しい雨の夜、露子は襲ふが如き外氣を物ともせず、立出て、雨戸に凭れて洋燈を一方の手にさゝげて、一心に彼方を眺めてゐた。庭に雨の脚白く、急しく落つる點滴のしぶきに、袂も袖もぬるゝばかりであつた。けれども最早心は飛去つて、其等に動ずる氣色もなかつたのであるが、何うしたのであらう。今宵に限つて彼方からは懐かしい燈火の影もない。それでも露子は氣を屈せず熱心に、今に其火影の見られやうと信じて、一時二時突立つた儘待つてゐたが、雨の小歌になるにつれて、身を切るやうな風が添うて、薄着の體に、寒さが浸みるやうに覺えた。露子は猶も氣を引立てゝゐたが、

遂には逆も燈火の闇に求められぬと悟つて、はッと思ふと悲しみが胸を衝くやう、よろよとして倒れかけたのである。
此瞬間の露子の思ひは、疑いと怖れと悲しみとが、互ひに入れ違へて、心も亂るゝばかりであつた。

露子はよくと泣き出したが、自分一人が梶なま小舟の中に残されて、押流されもしたかのやうに思つたのである。

「お嬢様、また、また貴嬢、何う遊ばしたので御座います。」と聞きつけて来たお金は、背後から抱起しながら、自分も片手には涙を抑へて云つた。

「何う遊ばしたので御座います。貴嬢が一圖にさう無理なことなさらうと思召しても……、だから奥様があのやうにも氣遣ひ遊ばすのでは御座いませんか。少しはお氣を丈夫にお持ち遊ばして、静かに時の來ますのを待ち遊ばさねばなりません。奥様は貴嬢、勿體ない程、お嬢様のことをお氣遣ひ遊ばしてゐらつしやるんで御座いますもの。お嬢様をお可哀想と思召しても、世間の手前が御座いますして、あんなにも仰有つたのですけれども、お嬢様のことは能つく金に、私にもお話遊ばしたので御座いますよ。貴嬢がそんなに氣をお揉み

相思怨……とし火

相思怨……とし火

遊ばしても、お體が悪くなるばかりでは御座いませんか。いゝえ、もうね、どんなことが御座いまして、屹度お嬢様の氣に召すやう、この金がお嬢様になさつて戴きますから、何卒も少し落着いておいて遊ばせ。露子様、ね、そんなに泣いてばかりぢや遊ばしてはなりません。毎々申上げます通り、貴嬢のお心は私がよく存じてをりますから……。さ、もう遅くなりなますからお休み遊ばせよ、司馬様とはね、故意とも知らない振をなさつてをれば、其方が却つて奥様が可愛想とお考へ遊ばすともなるので御座いますよ。明日にも私がおまゐりまして、司馬様にもそつと事情をお話申して置ませうですから……。それはもう屹度、屹度もう遠からず露子様がお喜び遊ばすやうになりますよ。次郎様からもお近い中には、嬉しいお音信をなさつて下さいますでせう。ね、お風邪でも召すと不可ません。さ、まゐりませう。」

露子は聞かえてか聞かえずにか、顔も上げなかつた。

お金は開放された戸を閉めやうと立寄つたが、慕し來る夜風に、面を反けながら、おんむと身をすぼめてたぢろいなのである。

何時か雨は歇んでゐる。西の方に雲の切れ目からは、三つ四つ鋭い星の光が漏れた。此處

26/12/38

から正南に當つて更に大きい光が、星かあらぬか、明るく闇に隈を取つて瞬いてゐた。金は目を隠つたのであるが、突然うれしうな聲を張つて、

「お嬢様、早く早く御覽遊ばせ。早く御覽遊ばせよ。まア司馬様が、あううれしう」と伸び上つたのである。

がはと跣起したが、露子はそれと見て金の肩に支へられながら、涙に曇つた眼を拭ひもせず、凝然と肩越窺いたが、胸が追つて又わつと泣入つた。

何時迄、そんな憎なく二人は燈火に心を通はすであらうか。

縣は何をしてゐるだらう。

丁度この夕、司馬と同郷なる酒匂は縣から或る事を聞込んで、うれしうにしてあつた。國元へと出立した。何を喜んだのであるか、それは分らぬ。例に依つて獨て何を目論見て居るのであらう。

相思怨

(をほり) 然るに同棲するべき人物は縣あり
月夜もあはれ

相思怨……ともし火

三三

明治三十七年十月二十二日印刷
明治三十七年十一月十四日發行

相思怨 附
定價金七十五錢

著作兼
發行者

草村松雄
東京市小石川區表町百九番地

印刷者

佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

印刷所

株式會社 秀英舍
東京市京橋區西紺屋町二十六七番地



發賣元
賣捌所

東京市京橋區
尾張町一丁目一番地

合資會社 隆文館
全國各地書林雜誌店

▲口繪彫刻 中島正久 同印刷 吉田市松

近刊小説豫告

花の移り

板浪作 画行

十一月十五日發行

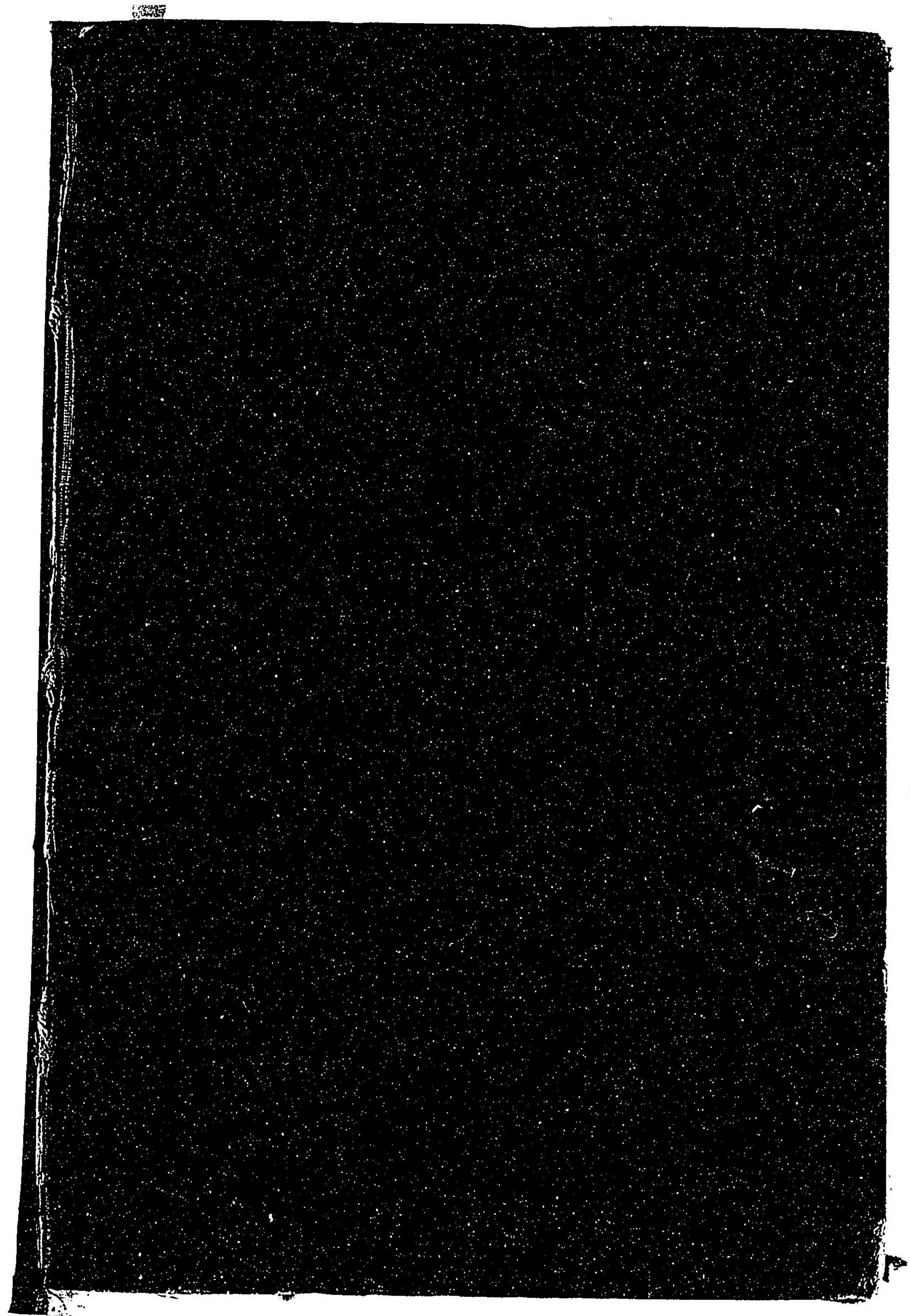


花の色は移りにけりな春や昔、かつては嬋妍たる美容艷顔に、女學校の花と歌はれしも、幸歟不幸歟理想の夢は遠山の雲よりも淡くして、片身こそ今は仇なる紅の袴に、過去を偲ぶ涙は、伏屋の雨と繁し、薄命なる佳人の半生を描きて凄哀無限の致を極むる所、これ豈柳浪氏獨特の壇場に非ずや、況んや

此著氏が經營慘憺の餘になりたるの傑作たるに於て、敢て疑はず文壇の白眉たることを

東京市橋區 隆文館 尾張町一ノ一

45
511





094319-000-9

45-511

相思怨

草村 北星/著

M37

DBQ-1817



45
STI

